

見せかけ目的語構文における統語論と意味論の
結びつきに関する研究

研究課題番号 10610516

平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究C-2）研究成果報告書

平成13年12月

研究代表者 井上 和子
(広島大学総合科学部教授)

見せかけ目的語構文における統語論と意味論の結びつきに関する研究

研究課題番号 10610516

平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究C-2）研究成果報告書

研究代表者 井上 和子

（広島大学総合科学部言語文化研究講座）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成10年度	300	0	300
平成11年度	300	0	300
平成12年度	300	0	300
総計	900	0	900

研究発表

学会誌等

- 井上和子 「経路のある変化とない変化——概念構造における状態変化の表示について」 *JELS* 15（日本英語学会第15回大会研究発表論文集），51-60，1998.
- 井上和子 「状態及び状態変化動詞の意味論」『言語文化研究』24，149-192，1998.
- 井上和子 「他動詞の語彙概念構造とその結果構文」『言語文化研究』25，133-160，1999.
- Inoue, Kazuko. "Verb Meaning vs. Construction Meaning: The Cases of *Hit*, *Spray* and *Load*," *English Linguistics* 18.2, 670-695, 2001.

見せかけ目的語構文における統語論と意味論の結びつきに関する研究

研究課題番号 10610516

平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究C-2）研究成果報告書

研究代表者 井上 和子

（広島大学総合科学部言語文化研究講座）

目次

序章	2 頁
第2章：理論的前提	4 頁
第3章：結果構文	16 頁
第4章：Way 構文	52 頁
第5章：結論	72 頁
注	75 頁
参考文献	79 頁

序章

英語には、(1)の各文に見られるように、動詞によって下位範疇化されていない名詞句、すなわち、見せかけ目的語(Fake Objects)を取る構文が存在する：

- (1) a. The professor talked us into a stupor.
- b. Drive your engine clean.
- c. Sam joked his way into the meeting.
- d. John insulted his way across the room.
- e. Bill slept the night away.
- f. Frank drank the night away.

(1a), (1c), (1e)で用いられている *talk*, *joke*, *sleep* は、いずれも自動詞であり、それゆえ、動詞の後の NP, *us*, *his way*, *the night* は、動詞によって認可されたものではない。また、(1b)の *drive*, (1d)の *insult*, (1f)の *drink* は、本来他動詞であるが、しかしながら、動詞の後に生じている NP, *your engine*, *his way*, *the night* は、いずれも、動詞によって下位範疇化されたものではない。それゆえに、これらのいずれの文においても、補語となっている PP, AP, Particle を取り去ると、非文となる：

- (1') b. *Drive your engine.
- d. *John insulted his way.
- f. *Fred drank the night.

本研究は、これらの見せかけ目的語構文のうち、(1a)-(1d)の結果構文、Way構文に焦点を絞り、語彙概念構造意味論の観点から、新たな分析を提示し、それによって、これらの構文の意味表示と統語表示がどのように結びついているかを、明らかにして行こうとするものである。

これら二つの構文を巡っては、近年様々な議論がなされている。まず、結果構文に関しては、大別して、統語的視点からの分析、語彙意味的視点からの分析、また、両視点を結合した形での統語・意味的視点から三種類がある。統語的分析としては、Hoekstra (1988)の Binary Small Clause Analysis, Yamada (1987)の Hybrid Small Clause Analysis, Carrier & Randall (1992)の Ternary Analysis などが主たるものである。語彙意味的分析には、'Lexical Subordination' というプロセスによる Levin & Rappaport (1988)の分析, Van Valin (1990)の Aspectual Analysis, Tenny (1994)の Aspectual Role Analysis, Jackendoff (1990)の Superordinate Adjunct Rule による分析などがある。統語・意味的分析には、Levin & Rappaport Hovav (1995)の「述語の合成」分析や構文文法の立場からの Goldberg (1995)の「構文のイデオム」として捉える分析などがある。Way

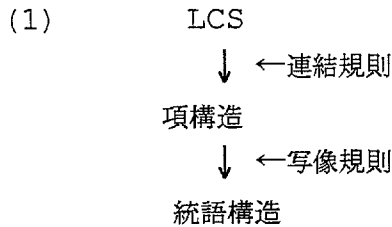
構文に関しては、語彙概念的アプローチ (Jackendoff 1990, 1992, Marantz 1992, 影山 1995, 影山・由本 1998), 構文文法的アプローチ (Goldberg 1995, 1996), 機能主義的アプローチ (高見・久野 1999), によるものなどがある。本研究では、概念構造意味論の枠組みの中で新たなモデルを提案することにより、先行研究によって明らかにされた二つの見せかけ構文にかかわる意味的・統語的諸特性が的確に説明されるのみならず、先行研究がもつ問題点をも克服できることを、示そうとするものである。

本研究冊子の構成は以下の通りである。まず、第2章では、本研究が基づく理論的枠組みの概略を示す。とりわけ、概念構造表示の基本的仕組み、概念構造と項構造及び統語構造との結びつきに、焦点が置かれる。第3章は、自他結果構文の議論に当てられている。はじめに、他動詞及び他動詞結果構文が、第2章で提案したモデルで、どのように概念構造表示されるかを明らかにし、その論拠を提示する。その後、他動詞結果構文分析が、自動詞結果構文へ拡張できることを論じる。最後に、自他動詞結果構文の概念構造での項が、統語的項にどのように写像されるかを示し、その論拠を挙げる。第4章は、Way 構文の分析を扱う。従来、Way 構文には、基本的な Means としての読みと二次的な Manner としての読みの両方があると言われている。この二つの読みが、第2章で提案した概念構造表示モデルで、どのように表示仕分けられるかなどが、議論の中心となる。最後に、第5章では、結びとして、以上二つの章にわたる見せかけ目的語構文の分析から引き出される理論的一般化について述べる。

第2章：理論的前提

2.1. 理論的枠組み

本研究は、統語論、意味論の関係に関して、基本的に以下のようなモデルを想定している：



この(1)のモデルは、Rappaport & Levin (1988), Levin & Rappaport Hovav (1995), Pinker (1989), 影山 (1995), Kageyama (1997)等においても用いられているものである。

しかしながら、本研究が理論的前提で上記の研究者と異なる点は、概念構造の表示に関してである。その種たるものは、次の2点である。

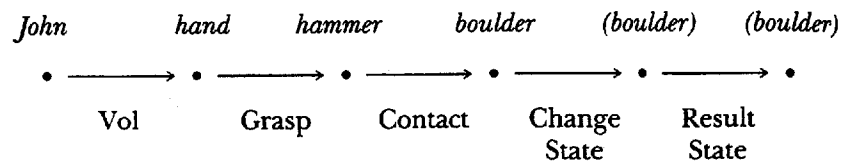
2.2. 概念構造表示に関する前提

2.2.1. Manner/Means/Instrumentに関して

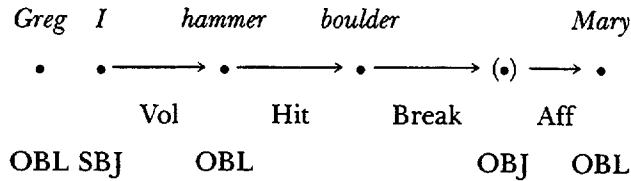
最も大きな相違点は、上位事象構造の表示の仕方である。筆者が採用するモデルは、Croft (1991)の“Causal Chain”の概念を導入している。例えば、(2a), (2b)は、Croftでは(3a), (3b)のように表示される：

- (2) a. John broke the boulder with a hammer.
b. I broke the boulder with Greg for Mary by hitting it sharply with a hammer.

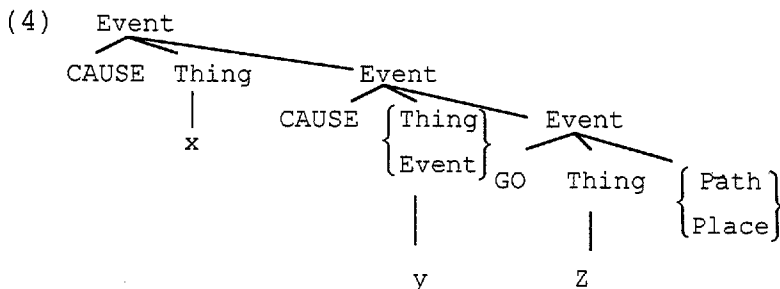
(3) a.



b.



ここで、以下に提示する本研究のモデルに本質的関連性をもってくる点は、“Causal Chain”における Instrument や Means の位置である。すなわち、Agent や Patient はそれぞれ、“the initiator of an act of volitional causation,” “the end point of an act of physical causation” (p. 176) と定義されるのに対し、Instrument, Means, Manner は、“Causal Chain”における相対的位置によって決まってくると規定されている。以下に採用されているのは、Instrument/Means/Manner が使役において中間的位置を占めるといふこの概念である。



使役におけるこの中間的位置は、概念構造においては、CAUSE-関数を重複させることにより、以下のように表示できると想定する：

(4)の構造において、Xが Agent に、Yが Instrument/Means/Manner に、Zが Theme に、それぞれ相当する項である。Croft (1991)の“Causal Chain”モデルにおいて、使役の連鎖は、「潜在的には、無限に過去または未来に拡張することができる」(p. 172)ように、このモデルにおいても、中間的な Cause-関数の数は、不特定であると想定する。中間的使役の鎖の数が不特定であるということは、Yの位置に変項として起こる Instrument/Means/Mannerが、付加詞として統語的に実現する時、それらが任意的に生じることと相関関係にある。

さて、Instrument/Means/Manner が Y の位置を占めるとすると、この三者はどのように表示仕分けられるかということ、明確にしておく必要がある。

まず、取り上げられるべき問題は、三者のうち二者以上が同時的に生じる時、どのような順序になるのだろうか。この問題に関して示唆的なのは、Quirk et al. (1985: 561)の異なる過程付加詞同士の共起制限についての記述である。それは、以下のような例により示されている：

- (5) He *frugally* traveled *economy (class)*. [manner+means]
- (6) He travels *economy (class)* *by air* but *first (class)* *by train*.
[means + instrument]
- (7) She was *accidentally* struck with a racket by her partner.
[manner + instrument]

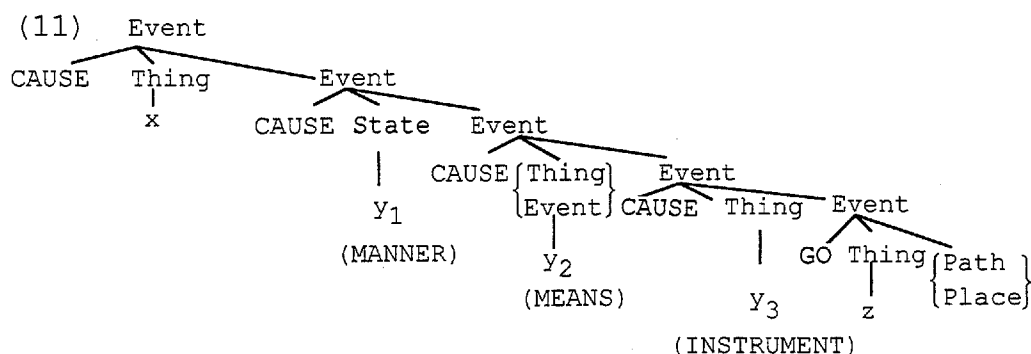
すなわち、(5)-(7)から導き出される順序は、以下のようである：

- (8) Manner > Means > Instrument

これと逆の順序の場合は、容認度は低くなる：

- (9) a. The doctor *thoroughly* treated the patient *homoeopathically*. [manner + means]
- b. *The doctor *homoeopathically* treated the patient *thoroughly*. [means + manner]
- (10) a. She was *thoroughly* examining a fossil *microscopically*.
 [manner + instrument]
- b. *She was *microscopically*¹ examining a fossil *thoroughly*.
 [instrument + manner]

従って、(8)のような生起順序が妥当なものであるとすると、(4)の y の位置はさらに、以下のように区分されることになる：



では、次に、投射の順序以外に、三者はそれぞれどのような特性によって識別されるだろうか。様態の付加詞が道具の付加詞と著しい対照をなす一つの点は、前者が主語指向であるという点である。ゆえに、以前の文献に見られたように、様態の付加詞は、以下のようなパラフレーズが成立する：

- (12) a. John drives his car carelessly.
 => John is careless at driving his car. (Lakoff 1965)

b. Do you beat your wife enthusiastically?

=> Are you enthusiastic in beating your wife?

(Lakoff 1970)

これに対して、道具の付加詞は主語指向的ではない。

(13) He examined the specimen *microscopically*.

≠> He was microscopic in examining the specimen.

様態の付加詞と道具の付加詞を対極とする時、その中間にあるのが手段の付加詞である。下記の(14a,b)における手段の付加詞には、主語指向性は見られな
いが、動名詞句をとる(14c,d)の手段付加詞の場合は、主語指向的である：

(14) a. He flew to Europe by British Airways.

≠> He was by British Airways.

b. They separate these linguistic units intonationally.

=> They are intonational.

c. He stopped the machine by pressing the button.

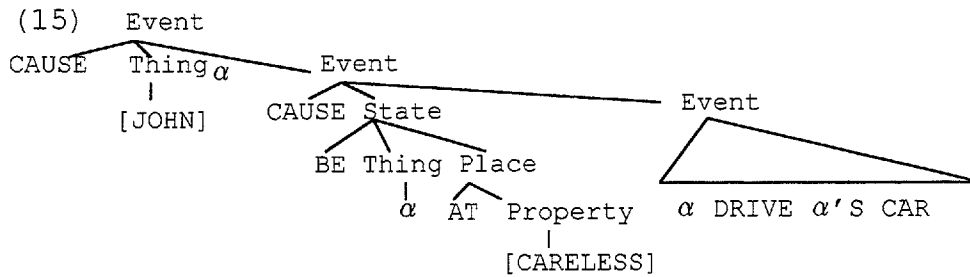
=> He pressed the button.

d. They saved up to £15,000 per patient by using the air ambulance to transport patients between hospitals.

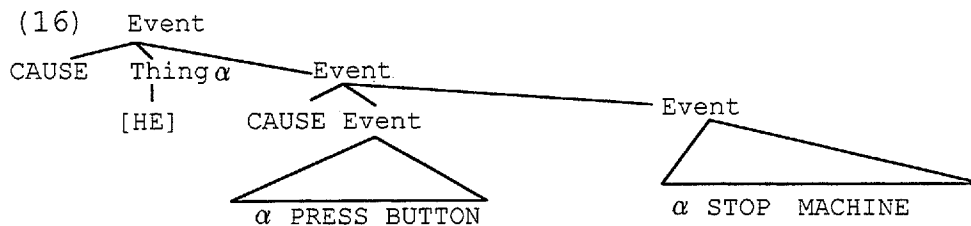
=> They used the air ambulance.

上記の事実から導き出される仮説は、Mannerは節構造(clausal structure)的項であるのに対し、Instrumentは非節構造(non-clausal structure)的項である、ということである。また、その中間的存在であるMeansは、非節構造でも節構造でもありうるということである。²

MannerとMeansが節構造であると仮定すると、次に起こってくる疑問は、では、両節構造は同じものなのか、異なるとすれば、両者を区別する特性とはどのようなものなのか、ということであろう。まず気付くのは、(12a)におけるような、形容詞を用いたパラフレーズは、Mannerの場合には可能であるが、Meansの場合には可能ではない。このことが示しているのは、以下のことである。前者の節構造は、状態を表わす構造であるのに対して、後者の節構造は行為を表わす構造である。両方に共通しているのは、その最初の項が最上位のCAUSE関数の項の束縛子(bindee)であることである。前者についてさらに付け加えると、(12a)の *carelessly* のような *-ly* 副詞の場合は、対応する形容詞文を表わす BE 関数構造であると推定される。(12a)の *carelessly* は、従って、以下のように表示される³：



一方, Means の場合は, (14c) を例にとると, 以下のように表示することができる:



Manner に (15) のような構造を想定する利点の一つは, 様態の付加詞には程度を表わす *quite*, *very* などの強調詞を補うことができるが, Means/Instrument ではできないという事実を説明することができる:

- (17) a. John drives his car *very carelessly*.
 b. *He stopped the machine by *very* pressing the button.
 c. *She was examining the fossil *very microscopically*.

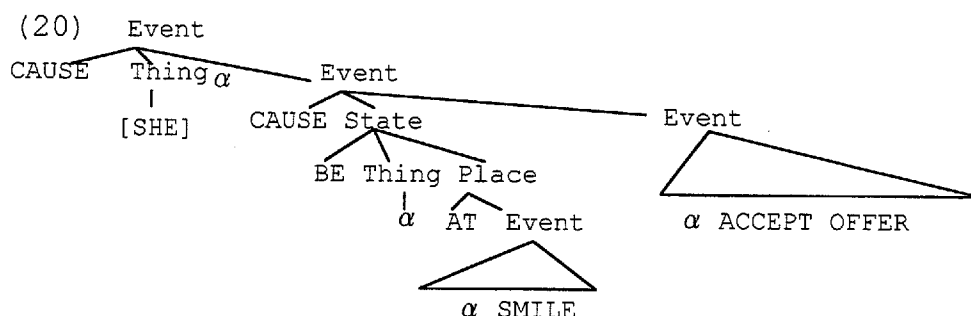
さらに, Manner が (15) のような STATE 構造を成しているとする主張は, (18) のような動詞から派生したと考えられる *-ingly* という語尾をもつ副詞から来ている:

- (18) *adoringly*, *challengingly*, *convincingly*, *daringly*,
grudgingly, *hesitatingly*, *jokingly*, *laughingly*,
mockingly, *smilingly*, *stutteringly*, *teasingly* ...

注目すべきは, これらの副詞は, すべて様態の副詞であって手段の副詞ではないということである。たとえば, (19a) で用いられている *smilingly* は, (19b) の手段の *by*-phrase によってパラフレーズされるというよりは, むしろ (19c) の進行形あるいは (19d) の *as* 節のパラフレーズの方が妥当である。

- (19) a. She accepted the offer *smilingly*.
 b. She accepted the offer by smiling.
 c. She was smiling in/while accepting the offer.
 d. She smiled as she accepted the offer.

ここで、'She accepts the offer' という Event を Event₁(E₁), 'She smiles' という Event をする時、が(19c), (19d)にパラフレーズできるということは、E₂が同時的に起こっていることを表わしている。一方、Means の場合は、必ずしも、同時的である必要はない。E₂の方がE₁よりも先行する場合もありうる。例えば、明らかに(3b), (14c)では、by-phraseで表わされている Event₂の方が、主文で表わされている E₁よりも時間的に先行している。従って、(19a)の場合も(15)とほぼ同形(isomorphic)な(20)のような構造を想定することができる：



(20)の BE-関数構造は、進行形概念構造表示である。進行形の構文が、一種の場所表現として捉えられることは、次のような事実によって裏付けられる：
 (i) (21)におけるように、whereで始まる疑問文の答えになること；(ii) (22)におけるように、空間的場所を表わす前置詞句と等位接続できること；
 (iii) (23)におけるように、述語を共有できること、などによるものである。

(21) Where's Joe? --He's reading.

(22) He is in bed and reading a book.

(23) He is at home in bed reading.

以上の Manner と Means の節構造の違いは、とりわけ、第4章における Way 構文の議論で、密接な関連性をもってくることになる。

2.2.2. 移動と状態変化に関して

次に、移動と状態変化の表示に関して、Jackendoff (1990)等との相違を述べておきたい。Jackendoff (1990)においては、場所の移動を表わす文と状態変化を表わす文は、それぞれ、GO, INCH-BEという別の関数により、取り扱われている。その理由の一つとして挙げられているものには、従来何人かの分析者が行なっていたように、GO-TOが INCH-BE-ATに分解できたとしても、GOは経路関数として外に様々なものを取り得るゆえに、GOは INCH-BEに還元できない、というものである。しかしながら、本研究においては、井上 (1998)

での考察に従い、GO 関数と BE 関数との関係は、以下のようなものであるとの仮定に立っている：

- (24) i. [GO([X], [Path])] = [INCH([BE([X], [Path])])]
ii. [GO([X], [Place])] = [INCH([BE([X], [Place])])]

この仮定は、次のような二つの主張に裏付けられている：(i)関数 GO, BE のどちらも、二番目の項として Path をとることもあるし、Place をとることもある；(ii)GO-Pathが対応するのは、INCH-BE-Placeではなく、INCH-BE-Pathである。また、逆に、INCH-BE-Place が対応するのは、GO-PathではなくGO-Placeである。従って、本研究では、GO-Placeが INCH-BE-Place の省略形式として用いられている。

2.3. 概念構造から項構造、統語構造への結びつき

さて、(4)のような概念構造モデルに基づく時、それは項構造へはどのように結びつくのだろうか。この問題については、Inoue (2001)での考察を発展させ、以下の(25)-(27)のような三つの結びつけ規則を提案する。

(25) Outermost Cause Linking Rule

The first variable argument of the outermost CAUSE-function is linked to the external argument of the verb/the construction.

(26) Go-function Argument Linking Rule

The first variable argument in a GO-function structure is linked to the direct internal argument of the verb/the construction.

(27) Path/Place Expression Linking Rule

On the condition that the first Theme argument of the GO-function is linked to the direct internal argument or \emptyset , the variable argument of a Path/Place-function in the same Event is linked to the indirect internal argument of the verb/the construction.

(25)-(27)の規則における‘the verb/the construction’とは、次章、3章、4章における複合的な事象構造の写像を念頭においた記載である。非複合的な事象構造では、動詞の概念構造と構文の概念構造は等しいので、動詞の語彙項目エントリーに記載されている変項に合致すれば、そのまま動詞の項構造での役割が付与されることになる。しかしながら、複合的な事象構造では、動詞の語彙項目エントリーで指定されている変項と合致するもののみが、動詞の項役割が付与される。(25)-(27)の項役割の条件には合致していても、動詞の

語彙項目エントリーの指定に合わない概念構造での変項は、構文の統語的項役割を付与される。従って、項構造では、従来の動詞の項役割に加えて、構文の項役割が存在することになる：

- (28) a. 動詞の外項： x
 動詞の直接的内項： <y>
 動詞の間接的内項： <P_{loc} z>
- b. 構文の外項： X
 構文の直接的内項： <Y>
 構文の間接的内項： <P_{loc} Z>

これらの規則は、最も深く埋め込まれた Event 構造から、順次、上の Event 構造に適用され、その適用順序は、以下のものである：

(29) Go-function Argument Linking Rule > Path/Place

Expression Linking Rule > Outermost Cause Linking Rule

また、これらのいずれの規則も、単文に対応する概念構造においては、その適用は、一度のみである。

動詞の項構造から統語構造 (D 構造) への結びつきに関しては、<非対格性の仮説 (Unaccusative Hypothesis)>にのっとった、次のような対応関係にあるとの前提に立っている：

- | | |
|-------------------|-----------------|
| (30) <u>動詞の外項</u> | <u>動詞の直接的内項</u> |
| 他動詞の主語 | 他動詞の目的語 |
| 非能格自動詞の主語 | 非対格自動詞の主語 |

また、構文の概念構造から統語構造 (D 構造) への結びつきに関しては、具体的には、3章、4章における結果構文、Way 構文で見て行くことになるが、次のような対応関係が成立すると仮定している：

- | | |
|-------------------|-----------------|
| (31) <u>構文の外項</u> | <u>構文の直接的内項</u> |
| 他動詞の主語 | VP 内の小節の主語 |
| 非能格自動詞の主語 | |

2.4. 「使役の連鎖」モデルの利点

さて、(11)のようなモデルを想定する時、そうでないモデルにおけるよりも、どのような利点があるだろうか。以下下位節で、3つの事例を取り上げ、このモデルの有用性を明らかにしたい。3つの事例とは、動詞 *wipe* の用法間に見られる関係、運動の様態を表わす動詞の移動動詞への転移、発出動詞の移動動詞への転移である。

2.4.1. 動詞 Wipe の多義性

動詞 *wipe* には、以下の (32) のような 3 つの用法がある：

- (32) a. Kay wiped the counter.
 b. Kay wiped the fingerprints from the counter.
 c. Kay wiped the polish onto the table.

(Iwata 1998: 70-73)

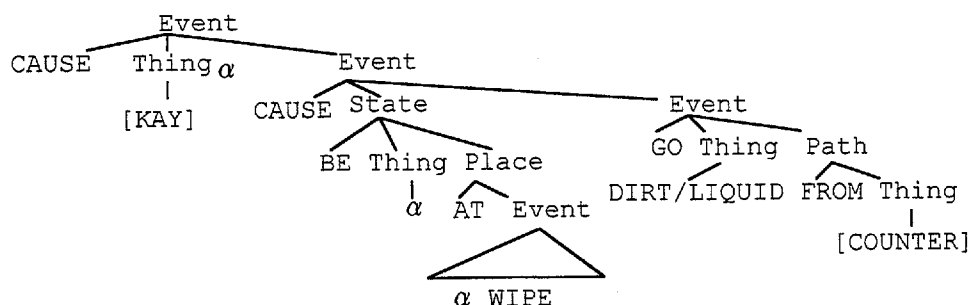
Iwata (1998) によれば、動詞 *wipe* の基本的意味は、*rub*, *scrape* などの動詞と同様、「運動による表面への接触」(‘surface contact through motion’) であると言う。それが証拠に、a, b の用法と c の用法は、相対立するものである。前者は除去動詞としての用法であるのに対し、後者は *put* によって代表される設置動詞としての用法である。(33) の 2 つの等位接続文の対立が、それを示している：

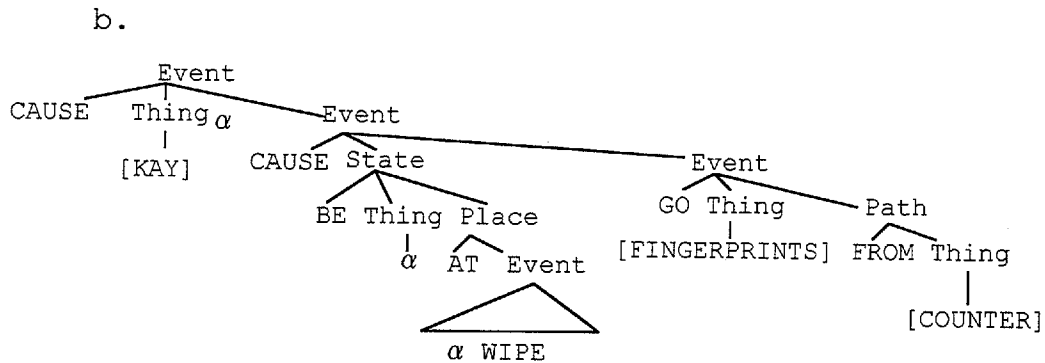
- (33) a. Kay wiped the counter and Mary fingerprints from the table.
 b. *Kay wiped the fingerprints from the table and the polish onto the counter.

上記の対立が示しているのは、a, b の用法の接続は成り立つが、b, c の用法の接続は成り立たないということである。

この状況を、「使役連鎖」モデルでは、以下のように説明することができる。まず、a-c の用法に共通の意味「運動による表面への接触」は、様態を表わしていると言える。それ故、この基本的意味は、(11) のモデルの MANNER の位置を占めていると考えられる。そして、a, b の用法の場合には、そのような MANNER COMPONENT と *remove* のような動詞の LCS である CAUSE-GO-FROM の関数構造よりなる「使役移動」の事象との結合である。すなわち、a, b の 2 つの用法は、(34) の a, b のように表示される：

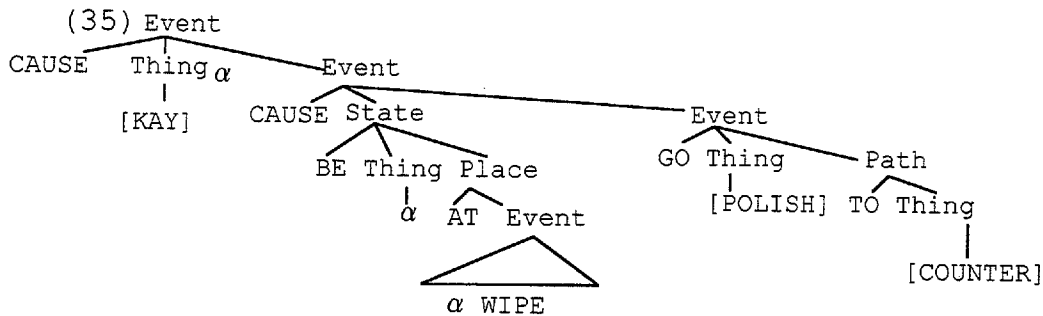
- (34) a.





上図が示しているように、a, bの2つの用法の概念構造上の相違は、GO関数の最初の項が定項であるか変項であるかである。(34a)の項構造への写像は、まず、(26)の規則が[COUNTER]に適用され、動詞の直接的内項に結び付けられ、(25)の規則が[KAY]に適用され、動詞の外項に結び付けられる。(34b)の場合には、(26)の規則が[FINGERPRINTS]に適用され動詞の直接的内項に、(27)の規則が[COUNTER]に適用され、動詞の間接的内項に結び付けられる。⁴

一方、cの用法の場合は、MANNER構造とCAUSE-GO-TOの「使役移動」の事象構造との結合であるということが出来る。(32c)の文は以下のような概念構造表示をもつ：



従って、(34a, b)と(35)の相違は、経路関数がFROMであるかTOであるかの違いに帰せられる。(35)の項構造への写像は、(34b)の場合と同様である。

2. 4. 2. 運動様態動詞の移動動詞への拡張

以下の(36), (37)に見られるような日英運動様態動詞の振る舞いの相違に注目してみたい：

(36) a. ?John-wa eki-e hasitta.

- b. John ran to the station.
 (37) a. ?John-wa kishi-e oyoida.
 b. John swam to the shore.

(Yoneyama 1986: 1)

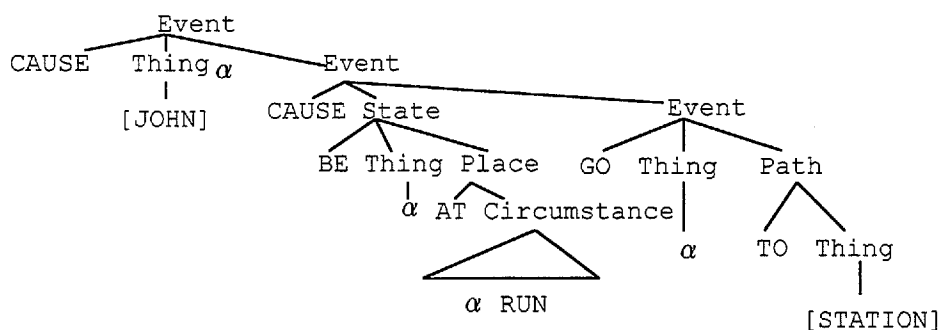
日本語の運動の様態動詞は、着点表現をとることを許さないが、英語の場合には全く問題がない。Talmy (1985)によれば、日本語と同様のことは、スペイン語においても観察されるという：

- (38) a. *La botella floto a la cueva.
 b. the bottle floated to the cave.

このような相違はどのように説明されるだろうか。

「使役の連鎖」モデルを用いるならば、英語の運動様態動詞の場合には、動詞 *wipe* の多義性と同様、概念構造において、事象の合成が起きていると、捉えることができる。たとえば、(36b)の概念構造は以下のように表示される：

(39)



英語においては、(39)の MANNER 構造の中の [RUN] は、統語的には本動詞 *run* となり、「使役移動」の事象構造の項である [JOHN], [STATION] が、それぞれ、構文の外項、間接的内項に結び付けられる。一方、日本語、スペイン語の場合には、そのような写像はなされず、GO が本動詞 *go* となり [RUN] は様態付加詞としてのみ統語的に実現される。

2.4.3. 放出動詞の移動動詞への転移

また、英語には、(40)の各文におけるように、音、そしてまれには、光の放出を表わす動詞が移動動詞に転移する現象が見られる：

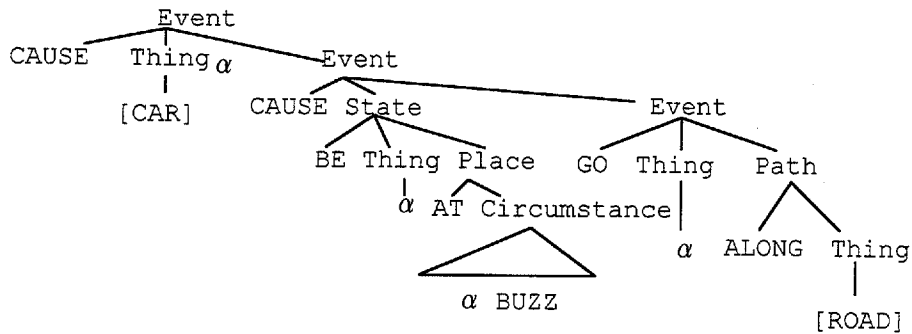
- (40) a. The cart rumbled down to the end of the street.
 b. The car buzzed along the road.
 c. Water thundered into the gorge.

d. The rocket streaked into the sky.

e. Fireflies flickered across the river.

(40)のいずれの文にも見られる特徴は、主語で表わされている物は、能動的に移動可能なものでありかつ音または光の放出体であるということである。そしていずれの文も、動詞が表わしているのは移動の付帯状況である。日本語で言うならば、「～しながら～に行った」に相当する。「使役の連鎖」モデルを用いるならば、たとえば、b文は(41)のように表示される：

(41)



(41)の MANNER 構造の中の述語 [BUZZ]は、(39)の場合と同様、統語的には本動詞 *buzz* となり、「使役移動」の事象構造の項である [JOHN], [ROAD]は構文の外項、間接的内項に結び付けられる。

第3章：英語の結果構文

3.1. 結果構文とは？

本研究で「結果構文」という用語で指すものには、(1)のような Goldberg (1995)等で「使役移動構文」と呼ばれているものと、(2)のような一般に「結果構文」と呼ばれているものの、両方が含まれている：

- (1) a. They laughed the poor guy out of the room.
- b. Frank sneezed the tissue off the table.
- c. Mary urged Bill into the house.
- d. Sam helped him into the car.
- (2) a. He broke the vase to pieces.
- b. He hammered the metal flat.
- c. The professor talked us into a stupor.
- d. He cried himself asleep.

(1)が「場所の移動」を表わし、(2)が「状態変化」を表わしている。そして、後者は、Gruber (1965), Jackendoff (1976)等で、「抽象的空間における移動」として捉えられるとする説に従うならば、前者の拡張とすることができる。例えば、*go, drive, lead*といった動詞は、以下に見られるように、aの「空間移動」の用法と並行して、bの「状態変化」の用法をもつ：

- (3) a. John went from New York to Boston.
- b. Thing went from bad to worse.
- (4) a. His daughter Carley drove him to the train station.
- b. The recession and hospital bills drove them into bankruptcy.
- (5) a. He took Dickon by the hand to lead him into the house.
- b. His abhorrence of racism led him to write *The Algiers Motel Incident*.

a, b いずれも、場所理論的観点に立つ概念構造表示では、経路関数を含む G0-関数で記述できる。

両構文を分ける唯一の相違は、統語的実現形である。「使役移動構文」では、補語は常に前置詞句であるのに対し、「結果構文」では、前置詞句以外にも、形容詞句、名詞句も起こりうる。

3.2. 結果構文の種類

英語の結果構文に関しては、これまでいくつかの分類がなされてきている。その中で最も一般的なのは、Carrier & Randall (1992)のように、主動詞

が他動詞であるものを「他動詞結果構文」、主動詞が自動詞であるものを「自動詞結果構文」として区別する方法である。それぞれの例は、以下のようなものである。

(6) Transitive verb resultatives

- a. The gardener watered the tulips flat.
(基底: The gardener watered the tulips.)
- b. The grocer ground the coffee beans to a fine powder.
(基底: The grocer ground the coffee beans.)
- c. They painted their house a hideous shade of green.
(基底: They painted their house.)

(7) Intransitive verb resultatives

- a. The joggers ran the pavement thin.
(基底: The joggers ran.)
- b. He sneezed his handkerchief completely soggy.
(基底: He sneezed.)
- c. The kids laughed themselves into a frenzy.
(基底: The kids laughed.)

Jackendoff (1990: 226-7)においては、さらに結果構文を次の4つに区分している: (i) 基底動詞が他動詞である場合 (e.g. The horses dragged the logs smooth); (ii) 結果構文の直接目的語が基底動詞の「斜格補部」(oblique complement)として現れる場合 (e.g. Harry hammered the metal flat -- Harry hammered on the metal); (iii) 基底動詞が自動詞で、結果構文の目的語が再帰形または身体の一部である場合 (e.g. Charlie laughed himself silly); (iv) 基底動詞が自動詞で、結果構文の目的語が主語と同一指示的でない場合 (e.g. ?The rooster crowed the children awake)

しかしながら、上記二者の分類は、基本的には、他動詞と自動詞の二分法に基づくものであり、それは以下のような問題をもつことになる。すなわち、3.4、3.5節で明らかにするように、ある種の他動詞結果構文は、自動詞結果構文と、次のような共通の統語的振る舞いをするのに対し、残りの他動詞結果構文はそうではない: (i) 動詞のアスペクトとしては atelic であるが、RP をとると telic になる; (ii) 「脱使役化」が容認されない。このような他動詞結果構文、自動詞結果構文にわたる共通性を、上記二者の分類では、捉えられないことになる。

Washio (1997)は、類型論観点から、結果構文を以下のように分類している:

(8)

		English	Japanese	French
Transitive Resultatives	(a) (Spurious)	✓	✓	✓
	(b) Weak	✓	✓	?
	(c) Strong	✓	*	*
Intransitive Resultatives	(d) Strong	✓	*	*

ここでの“STRONG resultatives”とは、動詞の意味と補語となる形容詞の意味が完全に独立しているものを言う。一方、“WEAK resultatives”とは、上記の意味で“STRONG”でない結果構文をいう。この区別は、丁度、日本語に対応する文をもたない英語の結果構文と日本語に対応する文をもつ英語の結果構文の、区別に一致する。例えば、(9)-(12)が WEAK resultatives の例であり、(13)-(16)が他動詞の STRONG resultatives の例である。

- (9) a. John painted the wall blue.
 b. John-ga kabe-o buruu-ni nut-ta.
 J.-NOM wall-ACC blue paint-PAST
- (10) a. Mary dyed the dress pink.
 b. Mary-ga doresu-o pinku-ni some-ta.
 M.-NOM dress-ACC pink dye-PAST
- (11) a. I froze the ice cream hard.
 b. boku-wa aisu kuriimu-o katikati-ni koorase-ta.
 I.-TOP ice cream-ACC solid freeze-PAST
- (12) a. He wiped the table clean.
 b. kare-wa teeburu-o kirei-ni hui-ta.
 he-TOP table-ACC clean wipe-PAST
- (13) a. The horses dragged the logs smooth.
 b. *uma-ga maruta-o subesube-ni hikizut-ta.
 horse-NOM log-ACC smooth drag-PAST
- (14) a. She kicked the dog black and blue.
 b. *kanojo-wa musuko-o azadarake-ni ket-ta.
 she-TOP son-ACC black and blue kick-PAST
- (15) a. The jockeys raced the horses sweaty.
 b. *kisyu-wa uma-o asedaku-ni hasirase-ta.
 the jockeys-TOP horse-ACC sweaty race-PAST
- (16) a. They beat the man bloody.
 b. *karera-wa sono otoko-o timamire-ni nagut-ta.
 they-TOP the man-ACC bloody hit-PAST

言うまでもなく、英語の自動詞結果構文の場合も、(13)-(16)の場合と同様、日本語に対応する表現をもたず、形容詞の意味が動詞の意味から予測されるものではないので、STRONG resultativesに分類される：

- (17) a. They ran the soles of their shoes threadbare.
b. *karera-wa kutu-no soko-o boroboro-ni hasit-ta.
they-TOP shoe-GEN sole-ACC threadbare pull-PAST
- (18) a. The plane flew the ozone layer thin.
b. *takusan-no hikooki-ga ozonsoo-o usuku ton-da.
many-GEN plane-NOM ozone layer-ACC thin fly-PAST
- (19) a. I danced myself tired.
b. *boku-wa zibun-o kutakuta-ni odot-ta.
I-TOP myself-ACC tired dance-PAST

なお、(8)における“Spurious”とは、“WEAK resultatives”に表面上似ているが、補語となる形容詞が結果状態を表わすというよりは、結果状態を決める「様態」を表わしている構文を指す。¹以下の(20)のような文がその例である。

(20) He tied his shoes tight/loose.

この種の場合には、形容詞は容易に副詞と交替可能になる：

- (21) a. He tied his shoelaces tight/tightly.
b. He tied his shoelaces loose/loosely.

さて、本研究では、この Washio (1997)の分類に従い、概念構造においては、結果構文は“WEAK resultatives”と“STRONG resultatives”の二種に分けられると仮定する。まず、次節 3.3 では、他動詞結果構文において、どのような動詞が“WEAK”結果構文を形成し、またどのような動詞が“STRONG”結果構文を形成するかを明らかにする。そして、この二つのタイプの動詞は、どのような意味的特性をそれぞれもつのかを論じる。その後、それぞれのタイプが、概念構造表示においてはどのように区別できるかを示す。さらに、3.4 節では、まず、WEAK と STRONG の他動詞結果構文が、概念構造においてどのように分析されるかを提示する。次に、3.5 節では、自動詞結果構文も STRONG の他動詞結果構文と同様の分析が成り立つことを論じる。3.6 節では、それぞれの結果構文の概念構造から、どのような項構造、統語構造に写像されるかを議論する。

3.3. 二つのタイプの他動詞とその概念構造

“WEAK resultatives”に現れる動詞と“STRONG resultatives”に現れる動詞とでは、どのような相違があるのだろうか。(9)-(12)に現れる動詞と(13)-(16)に現れる動詞を比較してみよう。前者の *paint*, *dye*, *freeze*, *wipe* のような動詞と後者の *drag*, *kick*, *race*, *beat* のような動詞の間には、

どのような意味的差異があるのだろうか。Washio (1997)でも示唆されているように、前者は、結果述語を取り除いたとしても、動詞自体がある種の状態への「性癖(disposition)」をもっているといえることができる。例えば、動詞 *dye* は、<pink>という概念は含んでいないにしても、<color>という概念は含んでいる。一方、後者のタイプの動詞は、そのような<特定の状態>は示唆されてはいず、目的語で表わされている対象への接触及び働きかけが意味されているのみである。概略的には、前者は <状態変化>動詞、後者は <接触・打撃>動詞とすることができよう。²

RP に関する二種類の動詞の区別の必要性は、多くの先行研究 (Levin & Rappaport Hovav (1995), Goldberg (1995), 影山 (1996)等)でも指摘されているところである。それは、以下の [A]-[F]のような意味的・統語的振る舞いにおける差異に裏打ちされたものである：

[A] Vendler (1967)の分類に従うと、前者は Actionを表わしており、後者は Accomplishmentを表わしている：

- (22) a. John pounded the metal for five minutes/*in five minutes.
 b. The new machine froze the food *for five minutes/only in twenty seconds.

別の言い方をすれば、a文は atelicな活動であり、b文は telicな活動である。

[B] 影山 (1996)で指摘されているように、接触・打撃動詞は自由に副詞句の *a lot* や *hard* と共起するが、状態変化を表わす他動詞とは共起しない：

- (23) a. John punched the boxer a lot.
 b. She caught the pickpocket and kicked him a lot.
 c.*The great earthquake broke old houses a lot.
 d.*She killed the big cockroach a lot.

(影山 1996: 74)

- e. She kissed me hard on the mouth.
 f. I hit him as hard as I could in the face.
 g.*They broke the door hard.
 h.*She killed the big cockroach very hard.

(Ibid.: 75-77)

[C] 接触・打撃の他動詞は、動能構文 (conative construction)に現れるが、状態変化の他動詞はそうではない：

- (24) a. Paula hit the fence.
 a'. Paula hit at the fence.

- b. Margaret cut the bread.
- b'. Margaret cut at the bread.
- c. Janet broke the bread.
- c'. *Janet broke at the bread.

(Levin 1993: 41)

[D] 接触・打撃の他動詞は、全体・部分の交替が見られるが、状態変化の動詞ではそうではない。

- (25) a. John hit/slapped Bill's leg.
- a'. John hit/slapped Bill in the leg.
- b. John broke/bent Bill's leg.
- b'. *John broke/bent Bill in the leg.

[E] 状態変化の他動詞では、中間構文が成り立つが、接触・打撃の他動詞で成り立たない。

- (26) a. The wall paints easily.
- b. Chickens kill easily.
- c. This book sells easily.

(Keyser & Roeper 1984: 384)

- d. *This wall kicks/pounds easily.
- e. *This metal hammers easily.

[F] 影山 (1996: 101)で指摘されているように、状態変化を含意する他動詞は、容易に完了形容詞³を形成することができるが、接触・打撃を意味する他動詞ではそうではない。

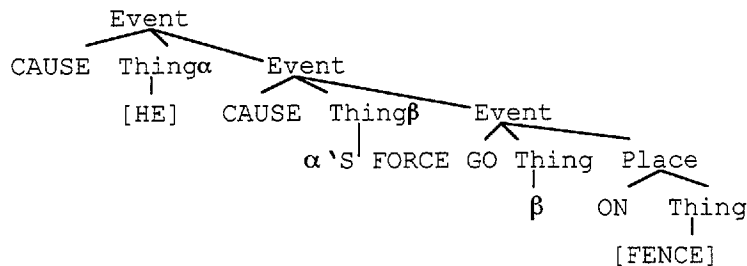
- (27) a. cooked food, boiled eggs, baked apples, the painted house, the broken fence ...
- b. *a hit boy, *a slapped boy, *the pounded metal, *the touched shoulder ...

以上6点にわたる、この二種類の他動詞の対立は、LCSにおける両者のどのような相違が反映されたものであろうか。すでに Fillmore (1970)では、格文法の観点から、(28)におけるような *hit* と *break* の相違を (28') のように記述している：

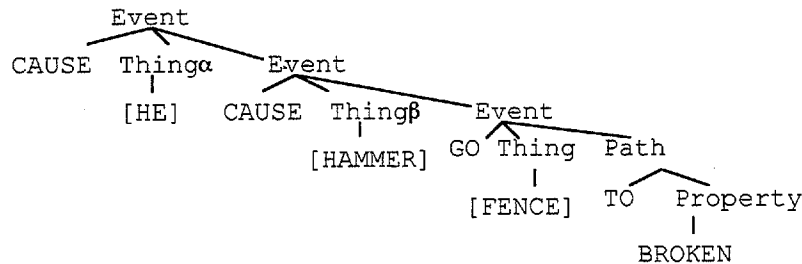
- (28) a. John hit the table.
- b. John broke the table.
- (28') a. (agent) (instrument) place
- b. (agent) (instrument) object

すなわち、(28a)の *hit* の場合には、主語である *John* が、自分の体の一部または何らかの道具を用いて、着点である *table* に衝撃を与えたということを意

味する。言い換えれば、John の体の力が Theme として、着点である table に移動したこと、着点と接したことを意味している。一方、(28b)の break の場合には、John が、table に力を加えることによって、あるいは、何らかの道具を使って、table が壊れていない状態から壊れた状態へと移行したということの意味している。換言すれば、John ではなく table が抽象的移動を行なう Theme であるということである。2.2 で提案した 'Causal Chain' モデルでは、hit と break の基本的な LCS は、(29)の a, b のようであると仮定する：
 (29) a. He hit the fence.



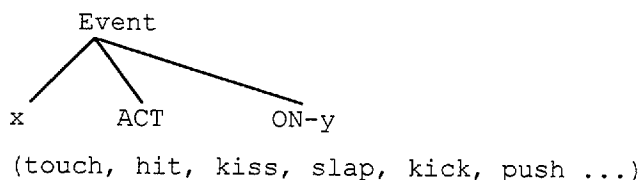
b. He broke the fence with a hammer.



(29a)と(29b)の対立が示すように、接触・打撃動詞 *hit* と状態変化動詞 *break* との LCS における基本的相違は、次の二点である：(i) 前者では、Instrument の項と Theme の項が同一指示的であるのに対し、後者ではそうではないということである；(ii) 前者では、Place 関数の項が物理的実体を伴う「物」であるのに対し、後者では、抽象的な「属性」であるということである。

先行研究(e.g. Pinker (1989), 影山 (1996))においては、接触・打撃動詞は以下(30)におけるように、ACT ON という関数のみによって成り立っており、GO 関数は含まないものとされている：

(30)



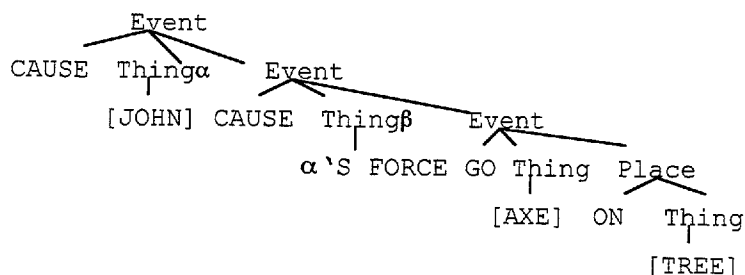
(影山 1996: 68)

本稿が、(29b)におけるように、下位事象構造に GO 関数をもつとする論拠としては、以下のような点が挙げられる。第一点は、接触・打撃動詞がもつ以下の a 文と b 文に見られるような交替現象が、説明できないことである：

- (31) a. John pounded the metal with the hammer.
b. John pounded the hammer against the metal.
- (32) a. John slapped Bill with his belt.
b. John slapped his belt against Bill.
- (33) a. John struck the tree with an axe.
b. John struck an axe against the tree.

(29a)に対して、(33b)のような場合は、Theme の項が変項となっている場合と考えられる：

(34) (= (33b))



従って、ACT-ON という関数構造だけでは、道具または Theme の項として働いている [AXE] の移動を表わし得ない。二点目は、接触・打撃を表わす自動詞との関係である。接触・打撃を含意する他動詞のかなりのものが、(31)-(33)の b 文に対応する自動詞用法をもつ：

- (35) a. A twig hit against his shoulder.
b. The liner struck against a rock.
c. The rain beat against the windows.
d. As she walked along, her shopping bag bumped against her knee.
e. The boat thumped against the wharf.

(b-e は研究社新編英和活用大辞典より)

これらの自動詞の主語は、移動により *against* という前置詞の項として、表わされている場所と接触・打撃を受けるに至ったことを表わしている。これらの動詞の用法が非能格動詞でないことは、非能格動詞では名詞化に伴い主語が *by-phrase* で標示されるという特性によって、窺い知ることができる。(36) におけるように、これらの用法は、このテストにはかからない：

- (36) a. *striking by a liner against the rock
b. *bumping by a shopping bag against her knee
c. *hitting by a small twig against his shoulder
d. *thumping by a boat against the wharf

従って、これらの用法の主語は、GO 関数の第一の項で表わされている Theme であるということが出来る。換言すれば、接触・打撃の他動詞の場合も、変項が被束縛項かにかかわらず、空間的に別の対象物のところまで移動し接触する Theme がその LCS に含まれていると考えるのが、自然であろう。

さて、*hit* と *break* の相違を(29a)と(29b)の違いとする時、上記の[A]から[F]に観察される両タイプの動詞の振る舞いの違いは、どのように説明されるであろうか。まず、[A],[B]は、着点に起こる項の性格上の違いから、来ている。(29b)で Theme である 'fence' が、一端 UNBROKEN の状態から BROKEN の状態に至ってしまえば、二度と元の状態に戻ることはできない。これに対し、(29b)において、「ジョンの体(またはその一部)」が着点である 'fence' に密着するという事は、瞬間的な出来事であるから、一定の時間で繰り返し密着させるということは可能である。ここから、*atelic* な読みが生じる。従って、接触・打撃の場合のみ、継続時間を表わす *for-phrase* や繰り返しを表わす *a lot* や *hard* と共起できる。

また、[F]で取り上げた完了形容詞は、動作というよりは結果状態に焦点をおいた表現であることは、Levin & Rappaport (1986)、影山 (1996) 等で指摘されていることである。物と物との物理的接触では結果状態は含意されないため、完了形容詞となるには不適格となる。一方、*break* のような動詞は二度と元に戻れない状態が示されているので、完了形容詞化に関して適格となる。従って、完了形容詞化の違いも両タイプの動詞の Goal 項に位置するものの性質の違いから来ている。ちなみに、影山 (1996) は、英語の -ed 形容詞の形成を次のように公式化している：

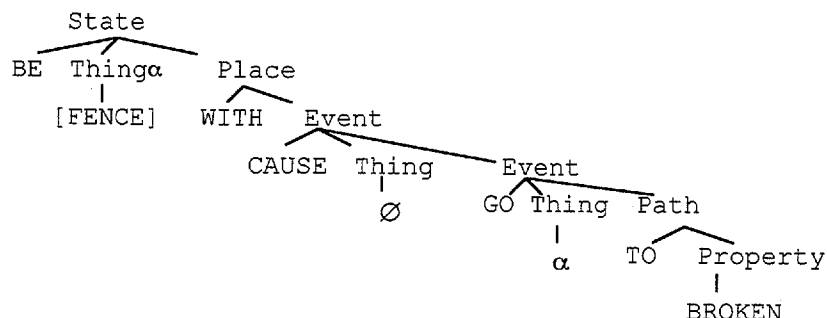
(37) [Event ... [Event y BECOME [State y BE AT-Z]]]

→ yi BE WITH [Event ... [Event y BECOME [State yi BE AT-Z]]]

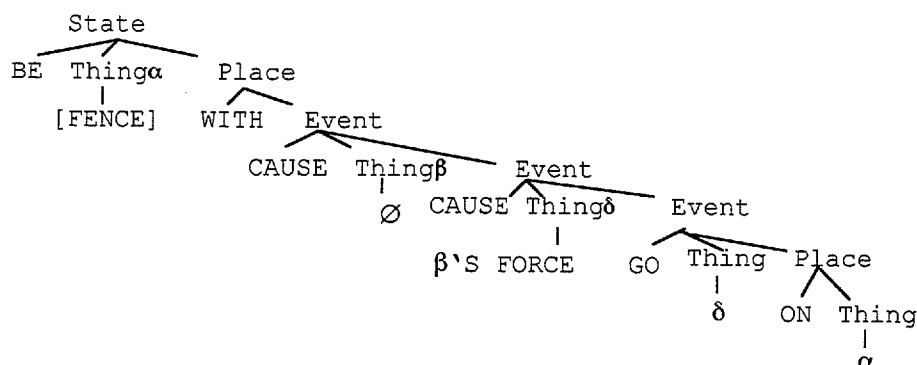
(37) が示しているのは、もともと状態変化の構造から状態変化の対象(y)を取り出して、新たに設けた BE WITH という述語の主語への格上げがなされている

ということである。換言すれば、-ed 形容詞の重要な機能は、概念構造における状態述語 BE の主語 (y) を、結果状態を担うものとして、取り立てるということである。(37) の出力構造を、本稿が採用しているモデルに翻訳すると、*break* と *hit* の完了形容詞構造は、(38), (39) のようであると提案する：

(38) The fence is broken.



(39) *The fence is hit.



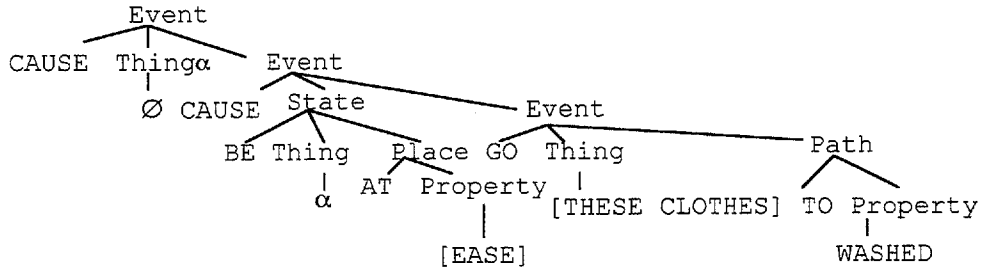
何故、(38) の構造が許容され、(39) の構造は許容されないのであろうか。次のような説明が、可能と思われる。(38) の構造では、変項 [FENCE] は α の適正な統率子となっている。なぜなら、 \emptyset は障壁とはならないからである。しかしながら、(39) においては、定項 β 'S FORCE が障壁となっているために、[FENCE] は α の適正な統率子となり得ないからである。この分析を支持する論拠は、道具の *with*-phrase や動作主の *by*-phrase との関係である。そのいずれも、本研究が採用している「使役の連鎖」モデルでは、CAUSE 関数の項であるとした。もし、(38) の構造にこれらが付加されたなら、 α の障壁となるので、非文となるはずである。果たして、予測通り、(40) の a, b の文は容認されない：

(40) a. *The fence is broken by the boy.

b. *The fence is broken with a hammer.

[E] の中間構文の形成における相違を取り上げてみよう。中間構文の形成においては、結果状態にある項を取り立てるという働きがあるといわれている。「使役の連鎖」モデルでは、まず、状態変化他動詞 *wash* の中間構文は、以下のような概念構造表示をもつと想定する：

(41) These clothes wash easily.



Linking

Rules:

↓

Argument

Structures:

<y>

まず、(41)における'∅'とは、統語構造における PRO のように、指示物が不特定である空範疇である。従って、この項が外項に投射されることはない。この構造では、変項は GO 関数の最初の項 [THESE CLOTHES] のみであるので、これが直接的内項に投射され、統語構造で主語となる。Keyser & Roeper (1984) は、(i)-(iv)の証拠に基づいて、中間動詞が出来事(event)ではなく、状態を表わすことを示した：(i) 特定の期日を表わす文脈では使うことはできない；(ii) 呼格付きの命令文に生じない；(iii) 進行形になれない；(iv) 知覚動詞の小節の中には生じない。(41)の構造を仮定すると、中間構文が状態であることは、どのように説明されるだろうか。(i)に関しては、特定の個人が結果状態を引き起こしたのではない故に、特定の期日を表わす文脈では使うことができない。これにより、(41)の Event 構造全体は、generic なものとなり状態化する。ただし、通常の状態動詞と異なるのは、目的を表わす不定詞節や道具付加詞が生起できる点である：

(42) a. Our dog food cuts like meat to be fed conveniently to your pet.

b. This meat cuts easily with a knife.

これは、(41)が動作主をとる構造であることにより説明できる。(ii)に関しては、(41)が generic な構造であることによるものである。呼格付きの命令文というのは、specific な Event 構造をもつことになるので、中間構文とは相容れない。(iii)の進行形、(iv)の知覚動詞の小節に関しても、(ii)と同様、specific な Event 構造を必要とすることによるものである。⁴

(41)と異なり、接触・打撃動詞の場合には、中間構文をもたないことは、(29a)

の図から説明できる。(29a)の GO 関数の最初の項は変項ではないので、内項に投射されることはない。二番目の項である Place 関数の項は、変項[FENCE]をもつので、これは内項に投射される可能性がある。しかしながら、状態を表わす項をもたないので、中間構文にはなり得ない。

次に、[D]の全体・部分構文の交替が、接触・打撃動詞にのみ当てはまるという問題を、取り上げてみよう。(29a)の構造からその答えが見い出される。この種の交替現象をここでのモデルでどのように記述すべきかという問題は残るが、(25)におけるような動詞の目的語にあたる項は、Themeではなく Locationであるということから来ている。なぜなら、「ジョンの体の一部に接触・打撃を行なう」ということは、「ジョンに接触・打撃を行なう」ということを含意するからである。

最後に、動能構文がなぜ接触・打撃動詞にのみ成立し、状態変化の他動詞には成立しないのかという問題に簡単に触れておきたい。動能構文に見られるような前置詞 *at* の用法は、「目標地点」を表わす以下のような文に見られる用法と同じものだと思われる：

- (43) a. Look at the moon.
b. He aimed at the target.
c. The demonstrators threw stones at the police.
d. The sufferer pointed his finger at a man running away.

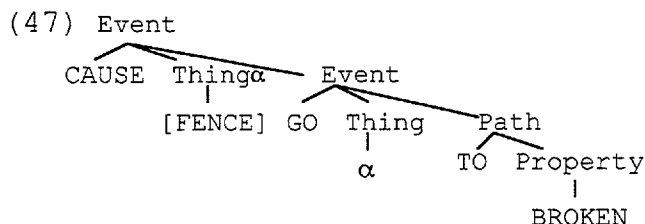
従って、動能構文における *at* の目的語の項も場所的な項と言えよう。対応する他動詞構文の目的語の項の場合と概念構造表示において、どのように区別されるかという問題には、本稿では立ち入らない。しかしながら、*break* のような状態変化を表わす他動詞が、なぜ対応する動能構文をもたないかという点については、はっきりとした答えを見い出せる。*break* の目的語に生じる項は、すなわち、Theme であって動能構文との交替を可能にする「場所的」項ではないからである。

最後に、他動詞 *break* の LCS との関係で、特に、言及しておくべき重要な問題は、「脱使役化」に関わる現象である。Levin & Rappaport Hovav (1995) 等において指摘されているように、他動詞 *break* は(44a)のような目的語をとる場合には、「脱使役化」が可能であるが、(45a)のような目的語の場合には、可能ではない。これに対し、(29a)の *hit* は、対応する自動詞用法をもたない。

- (44) a. Antonio broke the vase/the window/the bowl/the radio/
the toaster.
b. The vase/The window/The bowl/The radio/The toaster
broke. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 85)

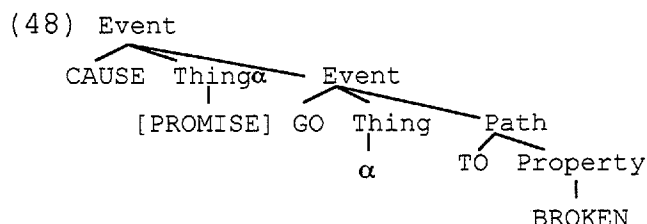
- (45) a. He broke his promise.
 b. *His promise broke. (Ibid.: 85)

- (46) a. He hit the fence.
 b. *The fence hit.



「脱使役化」に関するこのような事実を、(29a), (29b)の LCS との関連で、以下のように説明することができよう。まず、(29b)に対して、'The fence broke'の LCSは、以下のものである：

では、何故に、(45a)の *promise* のような名詞を目的語にとった場合には、このような構造は成り立たないのであろうか。答えは、[PROMISE]の場合には、[FENCE]と異なり、「使役主」とはなり得ないという点にある。以下の(48)のような構造は成り立たない：



ここで働いているのは、Inoue (1992: 137)において提案した、以下のような CAUSE 関数第二の項にかかる意味的制約である：

- (49) The second argument of CAUSE must be the kind of event that the first argument can be an immediate cause for.
 この制約は、(50), (51)の a 文に対して、b 文が成り立たないことを、説明するものである：

- (50) a. The eruption of the volcano caused/brought about an earthquake.
 b. *Strong wind caused/brought about an earthquake.
 (51) a. John brought it about that Bill met Mary.
 b. *John brought it about that Bill fell in love with Mary.

明らかに、いずれの b 文の二番目の項も、(49)の制約に適合しないのに対し、

a 文の二番目の項は、適合する。たとえば、「強い風」は「地震」の直接的原因とはなり得ないが、「火山の爆発」はなりえる。話を、(47), (48)の構造に戻すならば、「フェンス」や「花瓶」は、劣化などにより、自身が壊れる状態になる直接的原因になりうる。しかし、「約束」は人がするものであるから、そうはなり得ない。

上記の構造上の違いと相関関係にあるのが、*by oneself*との共起である：

- (52) a. The plate broke by itself.
 b. The door opened by itself.
 c. *The promise broke by itself.
 d. *The plate became broken by itself.
 e. *The door became open by itself.

(52)の文が示すように、(47)の LCS をもち得る a, b の各文は、*by oneself* と共起するが、(47)の LCS をもち得ない c-e の文は *by oneself* と共起しない、と言える。

さらに、能格自動詞 *break* が (47) のような構造であることを示唆するのは、フランス語、ドイツ語などとの関係である。英語の「脱使役化」がなされたと考えられる以下の (53a) のような自動詞に対応するのは、フランス語、ドイツ語では (53b), (53c) のような再帰動詞である。

- (53) a. break, freeze, open, solidify, melt ...
 b. se briser, se glacer, s'ouvrir, se solidifier, se dissoudre ...
 c. sich zerbrechen, sich erfrieren, sich öffnen, sich verhärten, sich auflösen ...

すなわち、これらの言語においては、(47) のような LCS の GO 関数の最初の項が CAUSE 関数の最初の項と同一指示の変項であるということである。

ちなみに、Levin & Rappaport Hovav (1995: 108) においては、自他の交替現象を項構造への写像の違いとして、以下のように説明している：

(54) *Intransitive break*

LSR	[[x DO-SOMETHING] CAUSE[y BECOME BROKEN]]
	↓
Lexical binding	∅
Linking rules	↓
Argument structure	<y>

(55) *Transitive break*

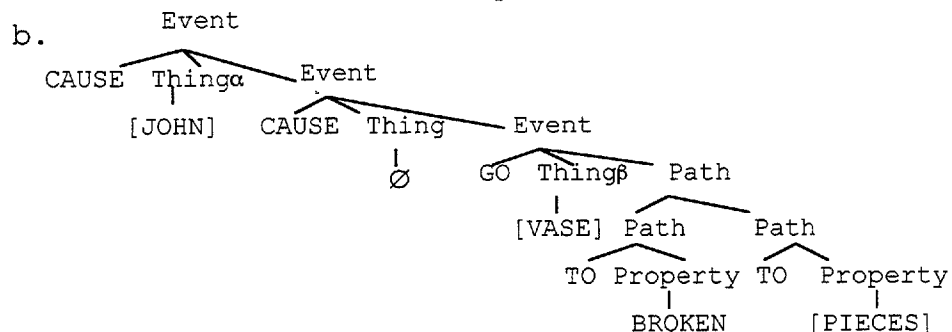
LSR	[[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]]	
Linking rules	↓	↓
Argument structure	x	< y >

しかしながら、(54)のLCSにおける問題点は、*by oneself*がこのLCSのどの部分を修飾しているのかという点である。(52d-e)が示しているように、BECOMEのEventを修飾しているとは考えられない。このことは、BECOMEあるいはGO関数より上位のCAUSE関数構造を修飾していることを意味する。さらに、*by oneself*という副詞句は、「主語指向」であるので、自動詞構文の主語に相当するそのCAUSE関数の第一の項は、(47)におけるように、変項でなければならないことを示すものである。

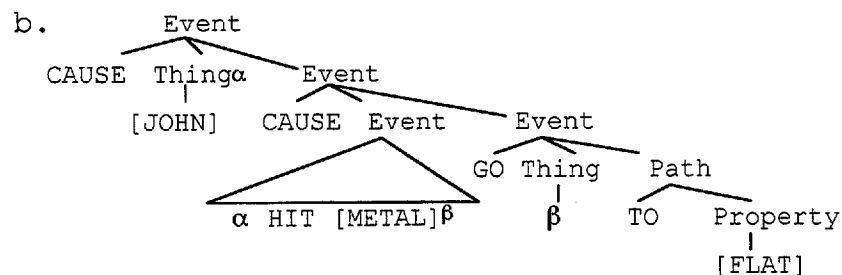
3.4. Weak と Strong の他動詞結果構文

さて、前節の議論を考慮に入れて、状態変化他動詞結果構文と接触・打撃他動詞結果構文は、概念構造表示では以下のようにであると提案する：

(56) a. John broke the vase to pieces.



(57) a. John hit the metal flat.



(56b), (57b)どちらも、「使役移動構造」をもつ点では共通である。しかしながら、(56b)の場合では、RP(resultative predicate)の *to pieces* は、GO関数の中で、TO BROKEN と共に、経路を形成する。このことは、一見、

Goldberg (1995:82)の以下のような「一義的経路の制約」に反するよう見える：

(58) 一義的経路の制約 (The Unique Path Constraint)

(a) Xは特定の時点において、2つの別々の位置(locations)に移動するようには、叙述できない。

(b) 移動は単一の情景(landscape)の中で、一つの経路を辿らねばならない。

しかしながら、(56a)は(58)に違反するのではなく、むしろそれに沿ったものである。なぜなら、二番目の着点[TO PIECES]は、最初の着点 TO BROKEN より特定化したものだからである。Gruber (1976: 85)は、(59)の文が示すように、二番目の経路の方が最初の経路より特定のである時、二つの経路表現の連続は成り立つと述べている：

(59) a. John sent the book to New York to Bill.

a' . *John sent the book to Bill to New York.

b. The duck swam from the shore from the tree.

b' . *The duck swam from the tree from the shore.

Goldberg (1995)は、結果構文は「使役化された運動構文」(caused-motion construction)の隠喩的拡張であると論じている。それゆえに、物理的空間移動を表わす表現に見られる二つの連続した経路は、抽象的移動である状態変化の場合も成立すると考えられる。同じことは、*paint (something) red* や *freeze (something) solid* など状態変化他動詞が RP をとった場合にもあてはまる。なお、(59a,b)の二つの連続した経路表現が、(56b)におけるように等位構造を成している論拠としては、これらの構造からの要素の取り出しは、等位構造制約にかかるということが挙げられる：

(60) a. *Where did John send the book to to Bill?

b. *Who did John send the book to New York to?

(61) a. *Where did the duck swim from from the tree?

b. *Where did the duck swim from the shore from?

一方、接触・打撃の他動詞結果構文の場合は、(57b)が示すように、主動詞とその目的語の部分は、「使役運動構文」の LCS の MEANS COMPONENT を成していて、目的語の項と「使役運動構文」の LCS の GO 関数とが、束縛関係によって結ばれている。これは、2.4.1-2.4.3に見られた概念構造における、二つの事象構造の合成現象と同種のものであるとの解釈に立っている。⁵

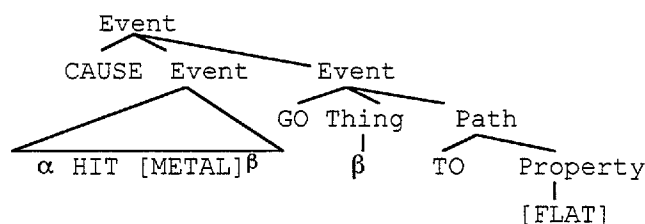
両構造の相違を示唆するものとして、まず挙げられるのは、対応する自動詞結果構文の存在である。状態変化他動詞の場合、そのすべてではないにしても、(62)のような自動詞結果構文が存在するのに対し⁶、接触・打撃の他動詞の場合

には、対応する自動詞結果構文は全く存在しない。

- (62) a. The river froze solid.
 b. The prisoner froze to death.
 c. The bottle broke open.
- (63) a.*The metal hammered flat.
 b.*The logs dragged smooth.
 c.*The dog kicked black and blue.
 d.*The man beat bloody.

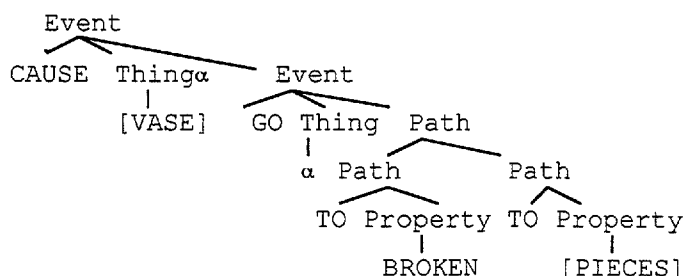
接触・打撃タイプの他動詞結果構文が対応する自動詞結果構文をもてないのは、他動詞 *hit* の Event 構造は、全体の「使役移動」の Event 構造中の手段を表わす構造だからである。すなわち、(57b)の構造が「脱使役化」すると、最上位の CAUSE 関数はなくなるので、残るのは以下のような構造である：

(64)



しかしながら、(64)の構造では、最初の項である Event にαという束縛子が含まれている。これは、束縛項(binder)に統率されていない項である故に、Empty Category Principle (ECP)に違反する。従って、(64)は成り立たない構造であり、それ故に、接触・打撃他動詞の結果構文は、対応する自動詞結果構文をもたない。一方、状態変化他動詞の結果構文が「脱使役化」が可能なのは、状態変化他動詞構文そのものが、前節で示したように、(47)のような対応する自動詞構文の LCS をもち得るからである。(56b)が、状態変化タイプの他動詞結果構文の LCS だとすれば、これに対応する自動詞結果構文の LCS は以下のようなものである：

(65)



対応する自動詞結果構文の存在以外に、(56b)、(57b)の違いを支持する論拠

には、以下のようなものがある。まず、telicity に関してである。3.3.1 において記したように、接触・打撃そのものは atelic である。しかしながら、RP をとった場合には telic となる：

(66) a. He pounded the metal for/*in ten minutes.

b. He pounded the metal flat in/*for ten minutes.

一方、状態変化他動詞の場合には、telicity に変化はない：

(67) a. John broke the vase in/*for a few minutes.

b. John broke the vase to pieces in/*for a few minutes.

この事実は、(56b), (57b) の LCS によってうまく説明できる。接触・打撃動詞の LCS である (57b) は、「使役運動構文」の概念構造の手段を表わす Event 中に存在し、RP は全体の「使役運動構文」の Event 中に含まれている。従って、全体としては、telic な Event となる。一方、(56b) の場合は、結果状態を表わす [TO PIECES] と定項 TO BROKEN とは同格であるので、telicity に変化はない。

次の論拠は、中間構文との関係である。前節の [B] で記したように、中間構文を形成できるか否かが、接触・打撃のタイプの他動詞と状態変化タイプの他動詞を識別する重要なテストとなっていた。後者は結果状態を含意するので、容易に中間構文を形成できる：

(68) a. The wall paints easily.

b. Chickens kill easily.

c. This book sells well.

(Keyser & Roeper 1984: 384)

一方、接触・打撃動詞の方は、結果状態をそれ自身では含意しないが、RP を伴うと中間構文を作ることができる：

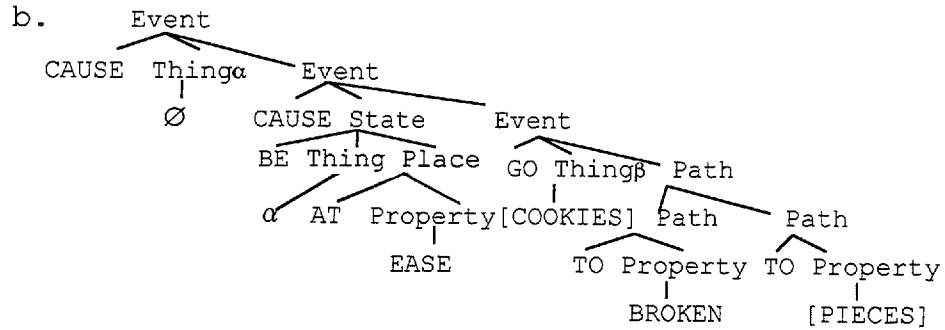
(69) a. This metal hammers flat easily.

b. This ball hits into the field easily.

c. The new seedlings water flat easily.

これは、RP を伴う状態変化動詞の構文の概念構造を (56b)、RP を伴う接触・打撃動詞構文の概念構造を (57b) とする時、以下のように説明することができる。(41) の構造にならい、まず、前者の中間構文の概念構造を (70b)、後者の中間構文の概念構造を (71b) と想定する。

(70) a. These cookies break into pieces easily.



Linking

Rules:

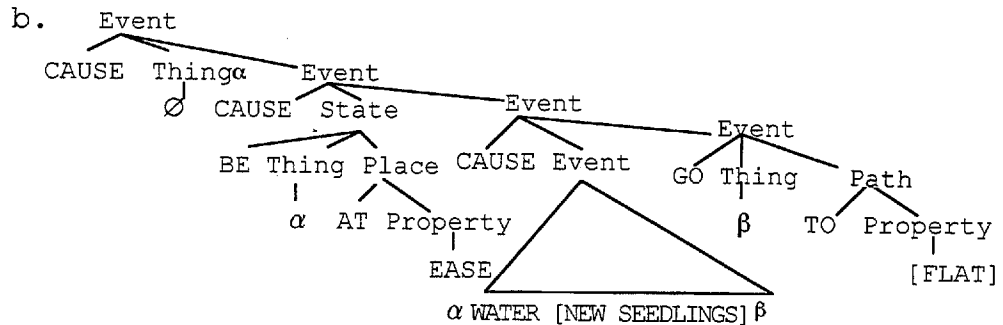
↓

Argument

Structures:

<y>

(71) a. The new seedlings water flat easily.



Linking

Rules:

↓

Argument

Structures:

<y>

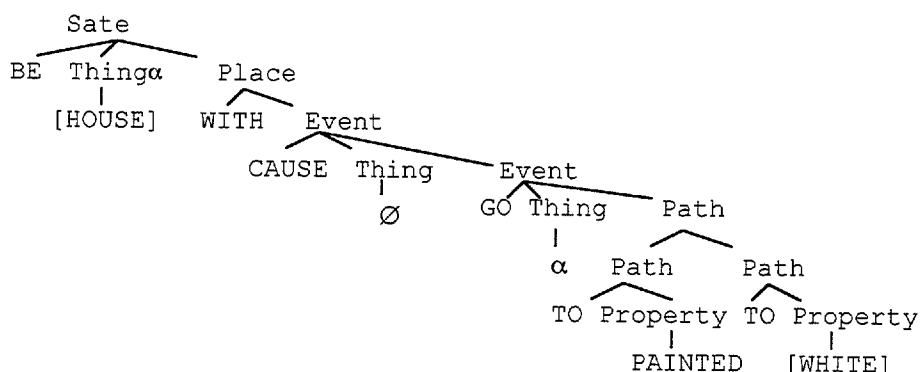
(70b)の構造は、(41)の構造と本質的に同形のものであるので、後者の構造が成り立つのと同様の理由から、成り立つことになる。一方、(71a)の概念構造(71b)は、何故、容認可能になるのか。(71b)では、GO関数の最初の項は変項ではなく、手段のEvent構造中の項によって束縛されている項である。その項が、[FLAT]という状態に至ったということを示しているため、[NEW SEEDLINGS]が内項に投射され、(71b)は中間構文として成り立つことになる。

次に論拠として挙げられるのは、完了形容詞での両タイプの結果構文の対立に関係している。前節の[F]において結果状態を含意する状態変化他動詞は、完了形容詞となりうるが、接触・打撃の他動詞はなり得ないということを見てきた。この対立は、RPを伴った場合でも、ほぼそのまま当てはまる：

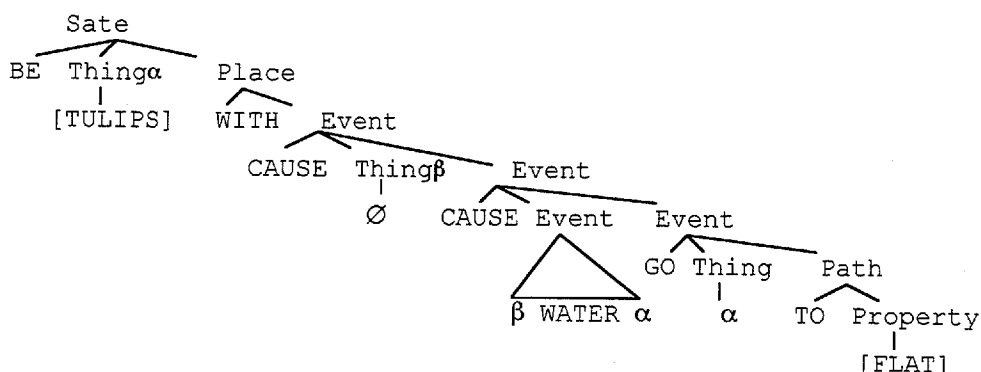
- (72) a. a clean-shavenman, fine-groundcoffee, a painted-white house, hard-boiled eggs, red-dyed hair ...
 b. *washed-clean clothes, *watered-flat tulips, *a shot-dead man ...

これを, (38), (39)で用いた分析に従うと, 次のように表示される。

- (73) The house is painted white.



- (74) *The tulips are watered flat.



(73)の構造は, 基本的に(38)と同形のものであるので, 全く問題はない。この構造においては, 変項 [HOUSE]は α の適正な統率子であるからである。それに対し, (74)の構造では, β の項が障壁となっているので, [TULIPS]は, α の適正な統率子である資格を, もたないからである。

さらに, もうひとつの論拠は, 数量詞連結構文との関係に求められる。三原(1998)は, 日本語の数量詞連結構文において, 数量詞が果たす役割は, 結果状態にある項を数量的に限定するものであるとの主張を, 行なっている。すなわち, 数量詞がアスペクト限定を行なっていると, 分析している。例えば, 下の(75a, b)文は, (75c)のLCSを共にもつという:

- (75) a. 庭の桜が虫害で2本枯れた
 b. 小包が午前中に2つ届いた
 c. [y BECOME[y BE AT z]]

(75c)の結果状態 z は, (75a, b)についてそれぞれ, 「枯れている状態, 届い

ている状態」であるが、数量詞「2本, 2つ」は、その結果状態について述べられている「桜, 小包」(y)を、さらに数量的に限定するということである。三原 (1999)は、英語の数量詞連結構文においても、同様に、数量詞が結果状態の数量的限定を行なっていると、指摘している。

さて、この指摘を念頭において、英語の結果構文と数量詞連結の相互作用を探ってみたい。以下の(76)の文に注目してみよう：

- (76) a. John broke the vases all to pieces.
- b. John painted the walls all white.
- c. ?John wiped the tables all clean.
- d. ?John pounded the metal all flat.
- e. ?/*The horses dragged the logs all smooth.
- f. *He watered the tulips all flat.
- g. *Pat kicked the boys all black and blue.

(76)が示しているのは、RPを伴う数量詞連結構文の容認度は、*break, paint*などの状態変化の他動詞を含む文が、一方の極にある時、もう一方の極には、*drag, kick, water*などの接触・打撃の他動詞を含む文が、存在するということである。また、他動詞 *wipe* の LCS が第2章の(31a)のようであると仮定するならば、容認度は両極の中間に位置することになる。

では、(76)の示している事実は、(56b), (57b)の二つの構造によって、どのように説明されるのであろうか。連結された数量詞の役割は、結果状態にある(あるいは、結果状態に至る)項を数量的に限定するということであるから、(75a)における(y)の項は(56b)では、変項[VASES]であり、まったく問題がない。しかしながら、(76g)における(y)の項は(57b)では、非束縛項βであるので、数量的限定を受ける対象としては、適格性を欠くことになる。言い換えるならば、(76g)の目的語である *the boys* は、概念構造においては Location の役割を担う変項であって、数量的限定を受ける資格のある結果状態に至る項、すなわち、Theme ではないということである。従って、以上のことから、(76)に見られる数量詞連結に関する事実も、(56b), (57b)の対立を支持するものであると言えよう。

なお、(56b), (57b)いずれの構造においても、RPは経路関数T0をとるGO関数構造として表わされている。場所関数を取っているとする先行研究もあるが、ここで経路関数をとるとする理由は、抽象的状态変化を表わしている場合でも、経路が存在していると考えられるからである。井上 (1998)で明らかにしたように、経路関数T0をたてることにより、次のような例にかかわる事実を説明することができる：

- (77) ??John hammered the metal a little/very flat.

すなわち, RPは *a little* や *very* といった限定詞とは共起しにくい。これは動詞 *become* に対して, *go* が段階的形容詞 (degree adjective) を取る時に現れる現象と同じである :

(78) a. The tire became a little flat.

b. ??The tire went a little flat.

(79) a. Things became a little bad.

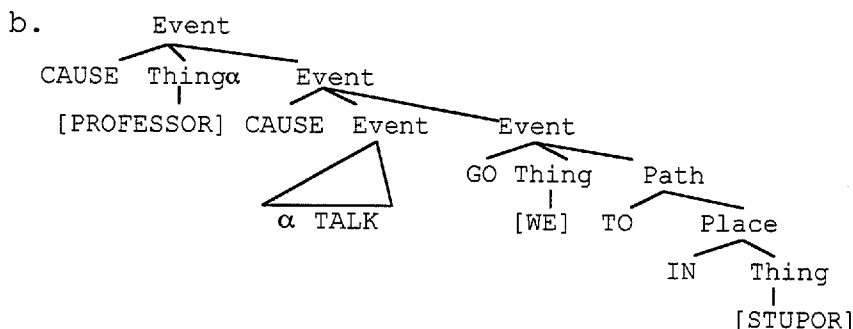
b. ??Things went a little bad.

このことは以下のように説明できる。限定詞を取り得る段階的形容詞は尺度を表わしている。例えば, *bad* という形容詞は, *good-bad* という尺度の一方の端にあることを意味する。これらの形容詞が表わす特性が経路の中の着点として埋め込まれる時, 尺度全体が経路, 尺度の一方の端が着点ということになる。限定詞を伴う形容詞は尺度の中間の地点を表わしているから, (78b), (79b) 文では本来着点にならない地点が着点の位置に来ていることを意味する。経路を含む形容詞補語が限定詞をとりにくいのはこのためである。(78b), (79b) と同様のことは, (77) にも当てはまる。

3.5. 「見せかけ目的語」をとる非能格自動詞結果構文

さて, STRONG の他動詞結果構文の概念構造表示が (57b) であるとするならば, 「見せかけ目的語」をとる非能格自動詞結果構文は, どのように表示されるのであろうか。本稿では, たとえば, (80a) のような文は, (80b) のような表示をもつと分析する :

(80) a. The professor talked us into a stupor.



上記の図から明らかなように, (57b) と (80b) の共通点は, 本動詞を含む節は, 全体の「使役移動」構文の LCS の手段を表わす Event を成していることである。言い換えると, (57b) が 'John made the metal flat by hitting it' とほぼ同型の構造を成しているように, (80b) も 'The professor made us go into a stupor by talking' と同形の構造であるということである。後者においては, (80b) が (57b) と異なる点は, 直接目的語の項の位置である。後者では, 目的語の項は, MEANS COMPONENT を成す Event 構造中の変項である。

すなわち、統語的に動詞によって、厳密下位範疇化された項であるということである。これとは異なり、(80b)における(見せかけ)目的語の項は、「使役運動」構文のLCSの中にある項であるということである。⁸

(57b)と(80b)の構造上の共通性を示唆するのは、以下に挙げる二つの統語的振る舞いにおいてである。まず、第一の論拠は、telicityに関してである。接触・打撃タイプの他動詞と同じく、非能格自動詞自体は atelic であるが、RPを伴うと telicになる。(81),(82)の対比が、それを示している：

(81) a. John talked/played/worked/spoke/walked/swam/danced a lot.

b. John talked/played/worked/spoke/walked/swam/danced for hours.

(82) a. The professor talked us into a stupor *for/in an hour.

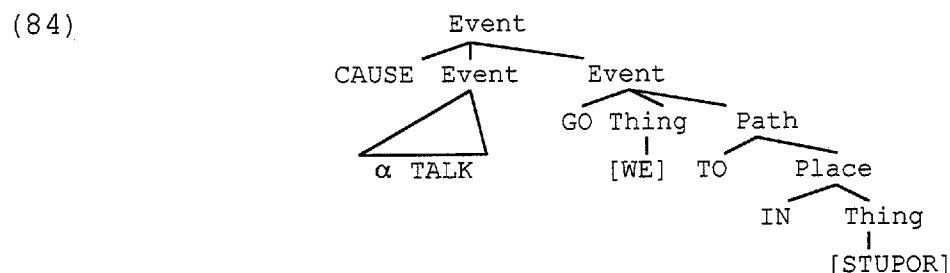
b. The joggers ran the pavement thin *for/in a few years.

従って、(80b)の構造において、(82a)が telic であることは、GO 関数構造が、状態変化を表わしていることに、起因している。

(57b)と(80b)の共通性を示す二番目の点は、(57a)が「脱使役化」された構造が成り立たないのと同様、(80a)の「脱使役化」も成立しないという点である：

(83) *The students talked into a stupor.

(80a)の結果構文が対応する自動詞結果構文をもてないのは、非能格自動詞 talk の Event 構造は、全体の「使役移動」の Event 構造中の手段を表わす構造だからである。すなわち、(80b)の構造が「脱使役化」すると、最上位の CAUSE 関数がなくなるので、残るのは以下のような構造である：



(84)の構造が成り立たないのは、(64)の構造と同様、最初の項である Event にαという束縛子が含まれていて、これは、束縛項(binder)に統率されていない故に、Empty Category Principle (ECP)に違反するからである。

次に、(57b)の構造の論拠となっていた、中間構文、完了形容詞化と(80b)の構造との関係について、述べておきたい。このいずれも、非能格のRP構文では、成り立たないことは、多くの文献で記されている通りである：

(85) a.*This type of pavement runs thin easily.

b.*This baby ticks awake easily.

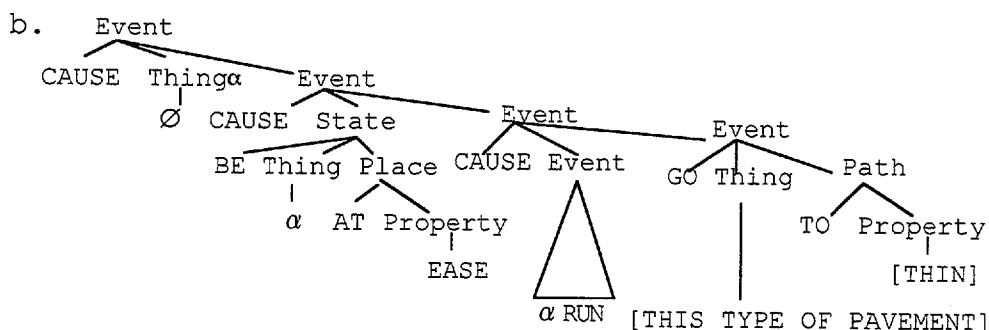
(Levin & Rappaport Hovav 1995: 43)

(86) a. *the run-thin pavement

b. *a ticked awake baby

これは、(79b)の構造では、どのように説明されるであろうか。中間構文の場合から、考えてみよう。RPを取る非能格自動詞の中間構文は、(70b), (71b)での分析にならない、以下のような概念構造をもつと提案する：

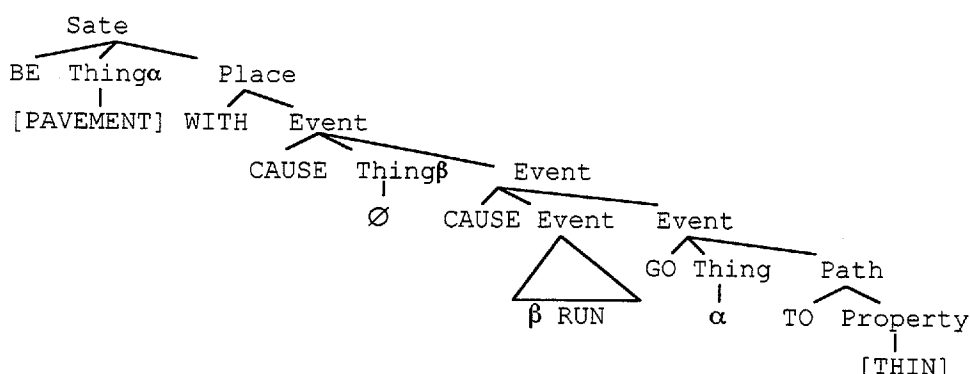
(87) a. This type of pavement runs thin easily.



(71b)と(87b)の容認度の違いは、後者の構造では、変項[THIS TYPE OF PAVEMENT]が、本動詞 *run* の LCS の項ではないことから来ていると考えられる。

次に、完了形容詞化(86)の場合を、検討してみよう。(73), (74)の完了形容詞化の分析を踏襲すると、(86a)の LCS は以下のようなものである：

(88)



(74)の場合と同様、この構造が成り立たないのは、変項[PAVEMENT]が α の適正な統率子の資格を有しないからである。なぜなら、 β がその障壁となっているからである。

さらに、(80b)の構造を支持する論拠には、数量詞連結との関係がある。前節(76)において、数量詞連結は、接触・打撃他動詞の結果構文の場合は、状態変化の他動詞のそれよりは、明らかに容認度が下がることを見てきた。注目したいのは、非能格動詞が RP をとる構文中では、数量詞連結の容認度が、(76)に

おけるよりも、上がることである。以下の(89)と(76)の c-g を比較されたい：

- (89) a. John ran the sneakers all ragged.
b. The dog barked the neighbors all awake.
c. The rooster cried the children all awake.
d. She cried her handkerchieves all soggy.
e. They danced their competitors all out of the contest.

この相違は、何を意味しているのであろうか。まず、前節で述べたように、数量詞連結構文においては、数量詞が果たす役割は、結果状態にある項、すなわち、Theme の項を数量的に限定することである。接触・打撃動詞の場合には、直接目的語は、Theme ではなく Location である故に、容認度が低くなると説明した。一方、非能格動詞の結果構文の場合、概念構造を(80b)のように仮定するならば、fake object は GO 関数の最初の項、すなわち、Theme ということになり、数量詞連結が可能となる。

次に、非能格動詞の場合、RP を伴わない(90)のような fake object だけをもつ文は、許容されないことは、よく知られた事実である：

- (90) a.*The joggers ran the pavement.
b.*The dog barked the neighbors.
c.*The rooster cried the children.
d.*She cried her handkerchieves.

この事実も、(80b)のような構造を支持するものである。なぜならこれは、非対格動詞を含む以下のような文において、観察される現象と同一のものであると、推定されるからである：

- (91) a. The prize went to Bill.
a'.*The prize went.
b. The liner struck against the rock.
b'.*The liner struck.
c. The tire went flat.
c'.*The tire went.
d. The boy is stingy.
c'.*The boy is.

すなわち、ここでは、以下のような概念構造における制約が、働いていると考えられる：

(92) 場所的項の特定化の制約

GO 関数(または BE 関数)の第一の項が、明示的項である時、第二の項も、特定化されなくてはならない。

(90)に対して、RP を伴わない(57b)が、全く問題のない文であることは、

(93) (=57b) John hit the metal.

前者の見せかけ目的語が、GO関数の第一の項の位置を占める変項であることを、示唆していると言えよう。

また、非能格結果構文の一つの特徴として、見せかけ目的語として、(94)におけるような再帰形または身体の一部である名詞句が生じやすい：

(94) a. John laughed himself silly.

b. John ate himself sick.

c. John walked his feet sore.

この特徴もまた、(80b)のような構造を支持するものである。なぜなら、これも(49)で述べた CAUSE 関数の二番目の項にかかる意味的制約に、関わっているからである。例えば、使役動詞 *make* の目的語の後に、過去分詞をとる構文の場合を、観察してみよう：

(95) a. John made himself heard.

a' . *John made her heard.

b. The candidate made his power felt.

b' . *She made his power felt.

(Inoue 1992: 138)

何故、(95a)の主語の John と目的語の NP が同一指示である場合には、容認され、同一指示でない a' の場合には、容認されないのであろうか。(49)の制約を用いれば、次のように説明できる。John は他人にかかわることではなく、自分自身にかかわることなら、引き起こすことができる故に、(49)の条件を満たすからである。b と b' の対立に関しても、同様のことが言える。全く同じことは、また、(94)についても当てはまる。John が笑ったり、食べたりすることによって、最も引き起こしやすい Event は、自分自身にかかわることだと、言うことができる。従って、(49)のような制約が成り立つとすれば、(94)のような文の存在は、(80b)の構造を示唆している。

この節の最後に、他動詞ではあるが、厳密下位範疇化していない目的語をとる、以下のような結果構文について、言及しておきたい。

(96) a. He washed the soap out of his eyes.

(Hoekstra 1984: 116)

b. He drove the car engine clean.

c. John drank all the teapots dry.

d. John ate himself sick.

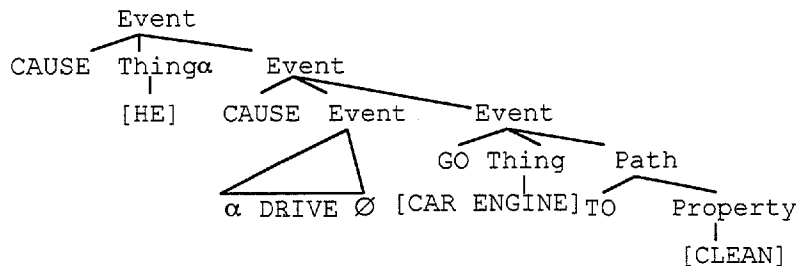
この種の結果構文に生じる他動詞は、*wash*, *eat*, *drink* などの無指定目的語 (Unspecified Object) を取るものである。ここで生じる疑問は、果たして、これらの文の LCS は、(57b)タイプなのか(80b)タイプなのであろうか。以下

に観察できる，これらの文の振る舞いが，その答えを指し示している：

- (97) a.*This type of car engine drives clean easily.
 b.*The car engine drove clean.
 c. John drank the teapots all dry.
 d.*drunken-dry teapots
 e.*John drank all the teapots/*John drove the car engine.

上記の中間構文，脱使役化，数量詞連結，完了形容詞化，RP の削除，に関する振る舞いは，すべて非能格自動詞結果構文のそれと同一のものである。従って，(96)における各文は，(80b)のタイプに属するということである。言い換えれば，これらの文の目的語の項は，「使役運動」構文の LCS の項に対応すると，結論づけられる。従って，例えば，(97a)の概念構造は，以下のものであると，言えるであろう：

(98)



興味深いことには，この種の結果構文では，本来の厳密下位範疇化した目的語を表わす必要のある時には，動詞単独の時には，許容されない道具の with-PP を用いるということである⁹：

- (99) a. John ate himself sick with a lot of hamburgers.
 a'.*John ate with a lot of hamburgers.
 b. John drank himself sick with a bottle of Vodka.
 b'.*John drank with a bottle of Vodka.
 c. They danced their competitors out of the contest with their most elegant waltzes.
 c'.*They danced with their most elegant waltzes.

3.6. 結果構文の概念構造から項構造，統語構造への写像

上記三節に渡って，英語の二つのタイプ of 他動詞とそれぞれの結果述語構文及び，非能格結果述語構文について，次の二点を明らかにしようとしてきた：
 (i) これらの構文が，概念構造において，どのように表示されるべきなのか；
 (ii) これらの構文が示している統語的・意味的振る舞いは，提案された概念構造とどのように関わっているのか。結果構文の概念構造は，大別して Weak タイ

プの「状態変化他動詞」結果構文と Strong タイプの「接触・打撃他動詞」及び「非能格自動詞」結果構文の、二つに分けられる。前者は、「状態変化他動詞」の概念構造と同型のものである。これに対し、後者は、本動詞の LCS は、全体の「使役移動」構文の概念構造の MEANS COMPONENT を成している、とするものである。さて、本節では、これらの三つの概念構造から項構造、統語構造に、どのように写像が行なわれるか、考察を行なうことにする。

3.6.1. 概念構造から項構造へ

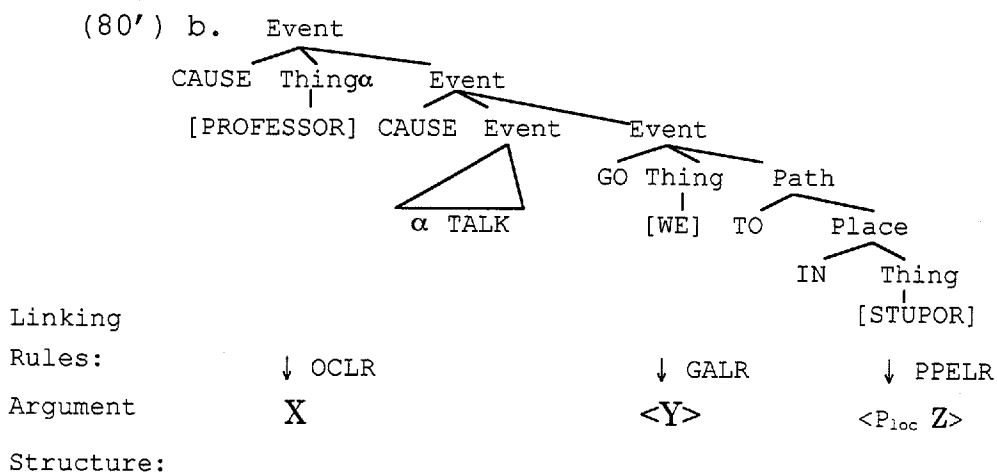
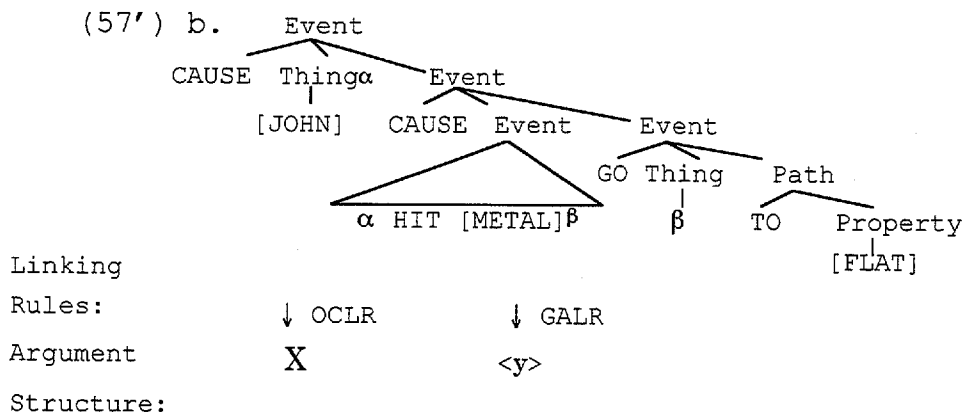
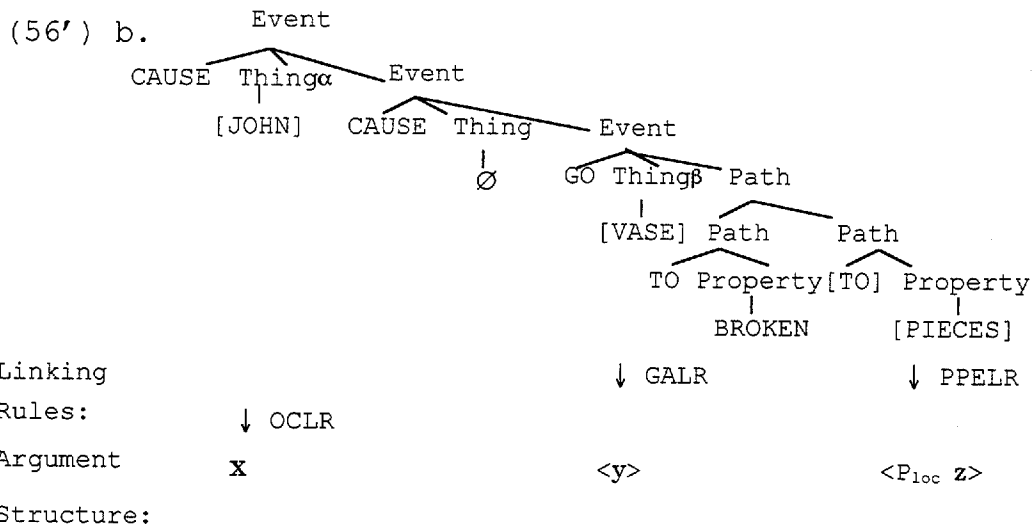
概念構造から項構造への写像に関しては、2.3 で三つの結び付け規則を提案した。それらの規則を用いて、(29a), (29b)の二つのタイプの他動詞の概念構造、(56b), (57b), (80b)の三つの自他動詞結果構文の概念構造から、それぞれの項構造に、どのように写像されるかを、示すことにする。

まず、(29a), (29b)から始めてみよう。ちなみに、動詞 *hit*, *break* の語彙項目エントリーでの指定は、(100)のようである（なお、(100a)の<FORCE>とは、変項のもつ選択制限を表わしている。）：

- (100) a. *hit*: [CAUSE([]_α, [CAUSE([<FORCE>]_β, [GO([β],
[ON([])]))])])]
b. *break*: [CAUSE([], [CAUSE([∅], [GO([], [TO([
BROKEN]])])])])]

(29a)の構造では、GO 関数内の最初の変項である [FENCE]に、GO-function Argument Linking Rule (以降、GALRと略す)が適用され、動詞の直接的内項に写像される。次に、CAUSE 関数の項である [HE]に、Outermost Cause Linking Rule (以下 OCLRと略す)が適用され、それが動詞の外項に結び付けられる。(29a)では、Location の項が GO 関数内の最初の変項であったが、(29b)では、Theme の項が最初の変項である。従って、これに、まず、GALRが適用されることになる。次に、[HE]が OCLRにより、外項に結び付けられる。(29b)における二番目の CAUSE 関数の項である [HAMMER]は、いずれの連結規則の適用の対象とはならないため、統語レベルでの付加詞に降格する。以上を図示すると、下記のように表わされる：

- (29') a. He hit the fence.

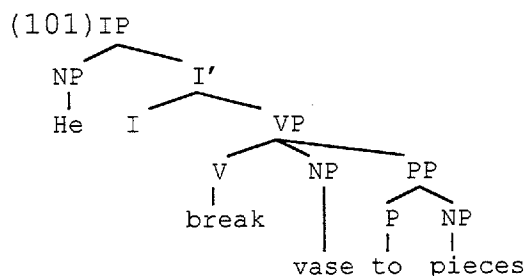


3.6.2. 項構造から D-構造へ

では、前節において論じてきた、三つの結果述語構文の項構造から写像され

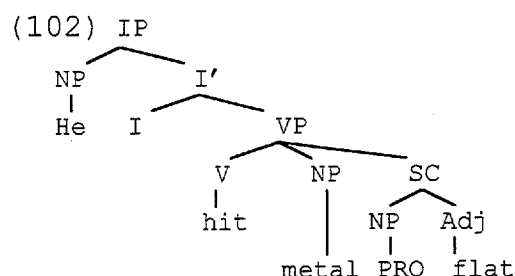
る D-構造は、それぞれ、どのようなものなのだろうか。2章の〈非対格性の仮説〉に基づく (30) 及び (31) の対応関係に従うと、この三つの項構造からの写像は、以下のようなものである。

まず、(56' b) においては、外項に写像された [HE] は主語に、直接的内項に写像された [VASE] は動詞の目的語に、動詞の間接的内項に写像された [TO PIECES] は、動詞が任意に取る前置詞の目的語に、それぞれ、結び付けられる。従って、その D-構造は、以下のようなになる：

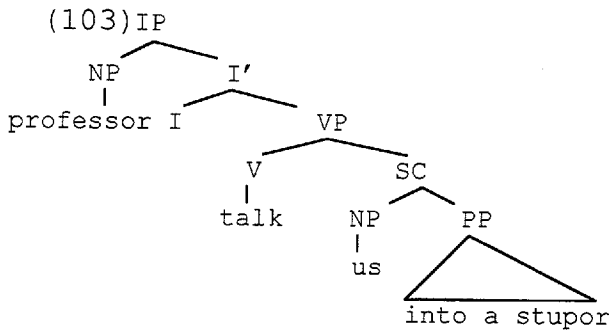


すなわち、これは所謂、VP が Carrier & Randall (1992) が主張する三項構造を成している。

次に、(57' b) の場合においては、構文の外項 [HE] は 2章の (31) に従い動詞の主語に、動詞の直接的内項 [METAL] は、目的語に連結される。動詞の項に結び付けられなかった被束縛項の β と TO 関数に [FLAT] が編入されて形成された形容詞 *flat* は述語関係にあるので、小節 (Small Clause) を成すと考えられる。従って、その D-構造は、以下のようなものである¹⁰：



最後に、(80' b) の場合では、動詞の内項に写像された項はない。構文の外項に結び付けられた [PROFESSOR] は、やはり 2章の (31) により、動詞の主語に写像される。構文の直接的内項、間接的内項に写像された [WE] と [STUPOR] は、これも述語関係を成しているので、小節を構成する。従って、(80' b) は以下のような D-構造に対応する：



この三つの統語構造は、どのような事実によって裏付けられるのだろうか。まず、いずれの他動詞結果構文の場合も、直接的内項をもつものに対し、非能格自動詞結果構文の場合には、それをもち得ない点を、検討してみよう。その論拠の一つは、(90)のような文の非文法性である。ここでは、(104)として繰り返す：

- (104) (=90) a. *The joggers ran the pavement.
 b. *The dog barked the neighbors.
 c. *The rooster cried the children.
 d. *She cried her handkerchieves.

(90)は、意味的には(92)のような制約によって阻止されたものであるが、統語的には動詞の直後の名詞句が真の目的語ではないということを表わしている。

二番目の論拠は、過程名詞化に関係している。他動詞結果構文は過程名詞化形にすると、動詞のあとの名詞句はof句として現れるが、自動詞結果構文は過程名詞化形は作れない：

- (105) a. The slicing of cheese into thin wedges is the current rage.
 b. The Surgeon General is warning against the cooking of food black.
 c. *The laughing of oneself into a frenzy is common among kids.
 d. *The walking of one's feet sore is not rare among novice joggers.

これもやはり、Carrier & Randall (1992)の主張するところによれば、過程名詞化が成り立つのは、動詞の直後の名詞句が直接的内項の場合のみであるから、他動詞結果構文の動詞のあとの名詞句は動詞の直接的内項であるが、自動詞結果構文の動詞のあとの名詞句は動詞の直接的内項でないことになる。しかしながら、Goldberg (1995: 183)は、Carrier & Randallのこの一般化への批判として、他動詞結果構文でも以下のような例外があることを指摘している：

- (106) a. *the shooting of the man dead¹¹
 b. *the washing of the face shiny clean
 c. *the driving of him crazy

では、他動詞結果構文は、どのような場合に過程名詞化が許容され、どのような場合に許容されないのかを、さらに検討してみよう。以下の例を観察されたい：

- (107) a. the breaking of the ice (into pieces)
 b. the painting of the door (white)
 c. the hitting of the metal (*flat)
 d. the kicking of the child (*black and blue)
 e. the pushing of the door (?open)
 f. the pounding of the metal (?flat)
 g. the beating of the dog (?dead)

(105a)の*slice, cook*, (107)の*break, paint*の結果構文に対して、(106)の*shoot, drive, hit, kick, push, pound, beat*を用いた結果構文は容認度が低くなることは、何を意味するのだろうか。注意深い読者ならもう気付いているはずである。すなわち、前者は動詞それ自身が結果状態を含意する状態変化他動詞であるのに対し、後者は働きかけだけを意味している接触・打撃動詞であるということである。では、次になぜ状態変化他動詞結果構文は過程名詞化を許容しやすく、接触・打撃他動詞は過程名詞化を許容しにくいのだろうか。これには過程名詞化への制約がかかっていると思われる。Fraser (1970: 92)等で記されているように、of句の名詞句は補部構造を含んでいたり補部構造の一部であったりすることは許されない：

- (108) a. *Our persuading of John to go occurred at noon.
 b. *The giving of a talk about the problem occurred in the evening.

of句の名詞句に後続できるのは、その動詞と姉妹である項のみである。以下の例がそれをしめしている：

- (109) a. The butler's bringing of the dinner into the room caused a fuss.
 b. His teaching of mathematics/*His teaching of John mathematics angered us.
 c. Their calling of the message to him/*Their calling him the message occurred at 3 p.m..
 d. *The judging of her "Miss U.S.A." startled us.

従って、(107a)のように状態変化他動詞結果構文が過程名詞化できるというこ

とは、(101)のように結果述語とその前のNPが姉妹関係にあるということにはかならない。これに対し、接触・打撃他動詞結果構文の過程名詞化が成り立ちにくくなることは、(101)のように名詞句と結果述語が姉妹関係にはない項同士であることを、示唆していると思われる。また、(109b), (109c)の例が示すように、直接目的語、すなわち、動詞の直接的内項以外の項がof句の中に生じることはできないのだから、自動詞結果構文が全く過程名詞化できないという事実は、この構文のfake objectが動詞の直接的内項ではないことを示していると言えよう。従って、以上の過程名詞化と結果構文の関係は、動詞の後の名詞句が直接的内項であるか否かという問題だけではなく、(101)-(103)の三つの構造の相違をも反映したものである。

三番目の論拠は、wh-島(wh-island)からの抜き出しである。他動詞結果構文では主節動詞の直後の名詞句をwh島から抜き出すことができるが、自動詞結果構文では抜き出すことはできない。次の(110), (111)の対立が示す通りである：

- (110) a. ?Which tables_i do you know why_j he wiped t_i clean t_j ?
 b. Which tulips_i do you know whether he watered t_i flat?
- (111) a. *Which baby_i do you know why_j the clock ticked t_i awake t_j?
 b. *Which men_i do you know when_j he laughed t_i off the stage t_j?

(天野 1999: 160)

目的語の位置からの移動である(110a, b)では、痕跡は動詞によって語彙統率され、空範疇原理を満たしている。一方、目的語の位置からの移動ではない(111a, b)では、痕跡は動詞によって語彙統率されないため、空範疇原理違反となる。

次に、(101)-(103)におけるように、RPがVP内部にあるとする点について、考えてみよう。VP構成素を統語的に合図するのは、do-soテストとVP-preposingである。いずれのテストにおいても、動詞putの下位範疇化されたPPと同じ構成素性のバーレベルに接続されていることがわかる：

- (112) a. *Jason put the book on the table, and Bill did so on the floor.
 b. *Bill fastened the shutters open, and Mary did so shut.
 c. *The joggers ran the pavement thin, and the runners did so smooth.
- (113) a. *Jason said that he would put the book on the table, and put the book he did on the table.

b. *Bill said he would fasten the shutters open, and fasten them he did open.

c. *The joggers thought that they would run the pavement thin, and run the pavement they did thin.

(Levin & Rappaport Hovav 1995: 49)

この点において、描写述語 (depictives) とは対照的である：

(114) a. Jason wiped the table tired and Mary did so awake.

b. Jason said that he would even wipe the table tired, and wiped the table he did tired.

(Ibid. 1995: 49)

では、次に、(102)のような構造の小節の主語には、どのようにして格付与がなされるのかという問題について、述べておきたい。ここでは、(115)におけるような通常の小節の場合と同じと考える。

(115) They consider [_{sc} each other foolish]

Chomsky (1981: 106-7)をはじめとして多くの文献において、(115)のような小節主語も(80a)のような自動詞結果構文の小節主語の場合も、統語的特徴は同じと考えられるので、小節主語の格標示についても同様のことが言えるであろう。例えば、通常の小節においても、(105c, d), (111)と同様、名詞化、wh-島からの抜き出しは、文法性が低くなる：

(116) a. *John's belief of Mary a genius

b. *their assumption of John dangerous

c. *the psychiatrist's judgement of the student well-adjusted

d. *their consideration of Mary a genius

(天野 1999: 159)

(117) a. ?Which girl_i do you know why_j he considers t_i a genius t_j?

b. ?Which men_i do you know why_j they assume t_i dangerous t_j?

(Ibid.: 160)

(117)のwh-島からの抜き出しは、(111)ほど文法性は低くはない。この点に関しては、今後の検討の必要がある。しかしながら、通常の小節は「状態」を表わしているのに対し、自動詞結果構文の小節は「状態変化」を表わしているという相違に、起因するのではないかと考えられる。

小節の主語であっても、一旦対格が付与されると、真の目的語であるかのように振る舞い始めるのは、通常の小節の場合と同じである。例えば、Goldberg (1995: 186)が指摘しているように、非能格動詞結果構文のfake objectが受身文の主語となったり、動詞との間に副詞などの要素の介在を許さないこと

は、通常の目的語の場合と同じである：

- (118) a. The baby was barked awake every morning by the
neighbor's noisy dog.
b.*The dog barked ferociously the baby awake.

3.7. 結び

本章においては、英語のWeakタイプの他動詞結果構文及びStrongタイプの自他動詞結果構文の概念構造表示と、その統語表示への写像を論じてきた。本研究がその開発を行なっている「使役の連鎖」モデルでは、前者の結果構文のタイプは、状態変化他動詞のLCS中の経路関数がRPと等位構造を成している構造として表示できる。一方、後者のタイプの結果構文では、本動詞のLCSは全体の「使役移動」を表わす事象構造中の手段を表わす部分を構成している。従って、これは2.4.1-2.4.3で見られた構文と同じく、概念構造中での事象の合成により生じてきた構文と分析した。この両タイプの概念構造分析により、従来から結果構文の議論の際取りあげられてきた中間構文化、脱使役化、完了形容詞化、数量詞連結などとの関係が、的確に説明できることを明らかにした。

概念構造から項構造への写像に関しては、2.3節の(25)-(27)の規則を(29)の順序に従って適用し、項構造からD構造への写像は、2.3節の〈非対格性の仮説〉に基づく(30)及び(31)の原則にのって行なわれた。その結果、WeakタイプのD-構造は、いわゆる三項構造、Strongタイプのそれは[V-NP-SC]のVP構造、Strongタイプの自動詞結果構文のそれは[V-SC]のVP構造を成していることを、明示的にした。この三種の結果構文の統語構造により、結果構文の過程名詞化、wh-島からの抜き出しなどに関わる統語的事実の明確な説明が可能とした。

次章においては、本章で提示した「使役の連鎖」モデルの概念構造上での事象の合成という考え方が、Way構文の説明にもうまく適用できることを見て行く。

第4章：Way 構文

4.1. Way 構文とは？

本章で取り扱う「見せかけ目的語構文」は、Way 構文と言われているものである。それは、(1)のような形式をとるものとされている：

(1) [SUB_i [V [POSS_i way] OBL]]

(1)において、Vは非状態動詞であり、OBLは経路を表わす前置詞句である。(2)の各文におけるように、この種の構文では、主語で表わされている指示物が、前置詞句で示されている経路に沿って、文字通りまたは比喩的に移動することを含意している：

(2) She began to feel her way to the door. (Brown: L03 0290)

(2)における目的語 *her way* が *a way* に取ってかわった(3)のような文や、類義語 *route* に取ってかわった(4)のような文も成り立つが、いずれも、主語で表わされている指示物の移動は含意しない：

(3) She began to feel a way to the door.

(4) She began to feel her route to the door.

このことは、(3)、(4)に移動を打ち消す節を後続させた以下の文から明らかである：

(3') She began to feel a way to the door, but she hasn't gone yet.

(4') She began to feel her route to the door, but she hasn't gone yet.

これに対し、(1)のパターンに当てはまるWay構文はそうではない：

(5) a. *She began to feel her way to the door, but she hasn't gone yet.

b. *Soon they fought their way into the lower middle-class suburbs, but they haven't gone yet.

c. *They made their way across the stormy Atlantic, but they haven't gone yet.

本研究で取り扱うWay構文には、(1)に属する従来からの文に加えて、(6)に見られるような方向を表わす副詞を含む文や(7)に見られるようなto-不定詞を補語としてとるような文も、含まれるとの考えに立っている：

(6) a. A house with a dangerous gas leak can be broken into immediately and, of course, the fire brigade can force their way in if the place is burning down.

b. couples have been known to make their way home

separetely.

- c. How do these birds find their way home?
- d. After a series of odd jobs including selling baby pictures door to door, he landed work as a reporter, working his way up until he was chief columnist for the Philadelphia Daily News.

(以上, COBUILD Word Bank)

- (7) a. In gentler strain, could anything be sweeter than that dear little brook telling its own story and how it came "from haunts of coot and hern", chatter-chattering its way to "join the brimming river"? (LOB: G22 116-119)
- b. It is a wonderful story of how these young people, who seemed at one time to have lost all that matters most, have won thier way back to find their own niche in a difficult world. (LOB: H25 161-163)

(6), (7)における文が, (1)の形式に当てはまる文と同じWay構文と見なせる根拠は, 以下におけるように, (5a,b)と並行した現象が認められるからである:

- (8) a. *Those birds found their way home, but they haven't gone yet.
- b. *He worked his way up until he was chief columnist, but he hasn't gone yet.
- c. *The brook chattered-chattered its way to join the brimming river, but it hasn't moved yet to join the river.
- d. *These young people won their way to find their own niche in a difficult world, but they haven't moved yet.

従って, (1)のWay構文の形式は, (1')のように修正される:

(1') [SUB_i [V [POSS_i way] OBL/ADV/TO-inf.]]

では, 次に, Way構文においては, どのような動詞が用いられるのであろうか。Levin (1993: 99)によれば, 以下に例示されるように, 非能格動詞及び他動詞はこの構文に生じ得るが, 非対格動詞は生じ得ないという。

(9) Unergative verbs

- a. They shopped their way around New York.
- b. He worked his way through the crowd.
- c. She talked her way out of the class.

(10) Transitive verbs

- a. She stipulated her way out of the problem.
- b. The boy pushed his way through the crowd.
- c. The explorers cut their way through the jungle.

(11) Unaccusative verbs

- a.*The children came their way to the party.
- b.*The flower bloomed its way to a prize.
- c.*They disappeared their way off the stage.

本当に非対格動詞は全く許容されないのか。また、そうだとすると何故なのか。こういった問題は、4.3節以降において、この構文の他の特性とともに、考察して行くことになる。

4.2. Way 構文の種類

Levin & Rappaport (1988), Jackendoff (1990)等においては、(12)のような文は、(13)の a,bにおけるように、手段としての読みと様態としての読みの二通りに解釈できると述べている：

(12) Sam joked his way into the meeting.

(13) a. Sam got into the meeting by joking.

b. Sam went into the meeting while joking.

しかしながら、このような主張は、すべての母国語話者によって認められたわけでもなく、また、先行研究のすべてによって受け容れられてきたものでもない。手段としての読みは疑問を差し挟む余地はない一方、様態としての読みはせいぜい marginal とする母国語話者も多い。二つの異なる読みの区別を認めない分析には、Salkoff (1988), 影山 (1995), 高見・久野 (1999)などがある。Goldberg (1995)は、二つの読みの違いは認めているものの、手段としての読みを第一義的なものとし、様態としての読みをその拡張としている。その理由に、次の三点が挙げられている。一点目は、Oxford University Press, Wall Street Journal, Lund, Department of Agricultureなどのコーパスにおいて、Way 構文は 1,177 例で、そのうち様態の解釈のものはわずか全体の 4%の 40 例にすぎないこと。二点目は、通時的な根拠として、OEDにおいて手段の解釈例の初出は様態の解釈例の初出よりも 4 世紀も前に遡ること。三点目は、様態の解釈をもつ Way 構文を不適格と判断する話者がいることである。

本研究においては、手段の解釈の Way 構文が中心的であり、様態の解釈の Way 構文はその拡張であることを否定するものではない。しかしながら、Way 構文そのものは、構文的に多義であることには変わりはない。従って、ここでは、二つの解釈の Way 構文が概念構造上、統語上どのような類似点、相違点をもつのか、考察して行くことになる。¹

Way構文が構文上多義であることを窺わせるのは、手段の読みには手段を表わす付加詞が後続できないこと、そして、様態の読みには様態の付加詞が後続できないことである。以下の例に注目されたい：

- (14) a. *He lied his way into the meeting by pushing.
b. *Max slept his way through school by laughing.
(bはSalkoff (1988: 59))
c. *Mary embraced her way through the reunion crowd by pushing.
- (15) a. *He wandered his way through the wood whistlingly.
b. *He gambled his way through the '60 whistlingly.
c. *They clanged their way up and down the narrow streets whistlingly.

さらに、手段と様態の二つの読みが構文的に多義であることを窺わせるのは、telicityとの関係である。中心的な手段の読みの場合には、先行研究でも指摘されているように、telicな活動を表わす。これに対して、様態の読みの場合には、atelicな活動をも表わし得る。以下の(16)と(17)を比較されたい：

- (16) a. Babe Ruth homered his way into the hearts of America
(in a year/?for a year).
b. John insulted his way across the room (in an hour/?for an hour).
c. Mary embraced her way through the reunion crowd. (in an hour/?for an hour).

(Tenny 1994: 41)

- (17) a. He whistled his way around the town (for an hour/in an hour).
b. He gambled his way around the U.S. (for a month/in a month).
c. They clanged their way up and down the narrow streets (for half an hour/in half an hour).

またさらに、様態の読みの場合には、主動詞の重複が認められるが、手段の読みの場合には、認められない。以下に例示する通りである：

- (18) a. We'd bought and bought our way up the Italian peninsula:
I was dizzy with shopping and new possessions.--H.
Brodkey, "Verona: A Young Woman Speaks" (影山・由本
1998:190)
b. Big Billie munched and munched his way through a pile

- of sandwiches.
- c. He would drink and drink his way down past Karl Johansgate until he got to the railroad station.
- (19) a. *He worked and worked his way through college.
b. *He dug and dug his way out of the prison.

4.3. Way 構文の特性

本節では、Way構文がどのような意味的・統語的特性をもつか、先行研究での指摘を取り上げながら、以下にまとめてみることにする。次の[A]-[E]のような特性が認められる。

[A] Goldberg (1995)においては、歴史的には*make one's way*から発達してきた構文である関係上、「困難さや障害を乗り越えて」の移動を含意しているとされる。それ故に、以下の(20), (21)ではa文もb文も、同じ動詞が用いられているが、適格性に違いが生じているという：

- (20) a. *Bill walked/ran his way down the hallway.
b. The novice skier walked her way down the ski slope.
- (21) a. ??Sally drank her way through the glass of lemonade.
b. Sally drank her way through a case of vodka.

(Goldberg 1995: 204-5)

例えば、(21b)より(21a)が容認度が低いのは、1ケースのウオッカを飲み干すのは、グラス一杯のレモネードを飲むよりは、はるかに大きな困難さを伴うからである。また、人が普通廊下を歩くのには困難さは伴わないが、スキーを初めてした人にとっては、スロープを歩いて下りるのでさえ非常に困難なことである。それ故に、(20b)は的確な文となるが、(20a)は不適格な文となる。

[B] Jackendoff (1990)は、Way構文に生じる動詞の意味的制約として、過程(process)を表わすか、繰り返し行なわれる終わりのある有界事象(repeated bounded event)を記述するものでなければならないとしている。例えば、下の(22a, b, c)は過程を表わし、(22d, e, f)は繰り返し行なわれる有界事象を表わす故に、適格な文となる：

- (22) a. We ate our way across the U.S.
b. Sue whistled her way through the tunnel.
c. The barrel rolled its way up the alley.
d. Bill belched his way out of the restaurant.
e. Sam joked his way into the meeting.
f. Babe Ruth homered his way into the hearts of America.

(Jackendoff 1990: 211-2)

これに対して, (23a)のような繰り返すことのできない出来事や, (23b)の*hide* や*crouch* のような一回きりの動作を表わす起動動詞は不適格となる:

- (23) a. *The window opened /broke its way into the room.
b. *Bill crouched/hid his way into the room.
c. *Bill slept/blushed his way to New York.

(Ibid.)

a の*break, open* は, 繰り返すことのできない出来事を表わしているからであり, b の*hide, crouch* は一回きりの動作を表わす起動動詞であるので, 制約に適合しないことになる。c の*blush, sleep* の場合に関しては, 「過程を表わすが, それは潜在的に均質的で一様な過程であって, 繰り返し行なわれる有界の行為ではないので, 不適格である」としている。

[C] *way* は意味のない統語的マーカーとして取り扱う分析もあるが, *way* に修飾語句を挿入できることから, 通常の名詞として機能していることがわかる:

- (24) a. Bill belched his miserable way out of the restaurant.
b. Sam joked his insidious way into the meeting.
c. The barrel rolled its ponderous way up the alley.

(Ibid.: 217)

[D] Levin & Rappaport Hovav (1995), Marantz (1992)においては, Way構文は見せかけ目的語を取る結果構文の一種に還元できると論じている。一方, Jackendoff (1990), Goldberg (1995)においては, 以下の(1)-(5)のような結果構文との相違を明らかにしている:

- 1) Way構文は多様なタイプの動詞を用いることが出来るのに対し, 結果構文では可能な動詞は限られている。Goldberg (1995: 217)は, (25)におけるような動詞はWay構文では用いられるが, 結果構文では用いられないという:

- (25) a. He bludgeoned his way through.
b. The players mauled their way up in the middle of the field.

- (26) a. *He bludgeoned himself crazy.
b. *He mauled himself silly.

(Goldberg 1995: 217)

- 2) 結果構文では異なる動詞をつなげて使うことができないのに対し, Way構文の場合はそうではない:

- (27) a. 'their customers snorted and injected their way to oblivion and sometimes died on the stairs' (OUP)

(Goldberg 1995: 217)

- b. Frock and roll your way around fashion's Edwardian influences ...
- c. To the accompaniment of Carib beer and nuts, Shukman jives and sweats his way around the islands, spiralling out of control to the tropical beat.
- d. They walk and talk their way through nearly three hours of a summer night.

(b-dは, COBUILDWordBank)

(28) *He snorted and injected himself dead.

(Goldberg 1995: 217)

- 3) Way構文では, 経路は作られたという解釈をもつが, 結果構文にはそのような解釈はない。このことは, Way構文の場合, 移動に伴う困難さや障害が存在するという解釈を生み出すもとになっている。
- 4) 結果構文は, 影山 (1995: 199)が指摘するように, 'goal-oriented' であるのに対し, Way構文は必ずしもそうではない。なぜなら, 単なる方角や目標 (toward, in the direction of), あるいは終点を指定しない経路 (along, around, among)などの前置詞句も起こり得るからである。
- 5) Way構文は, marginalではあるが, 様態の解釈が存在するが, 結果構文はそうではない。

このほか, 以下のような結果構文との相違が, 先行研究において指摘されている。

- 6) 4.2節では, Way構文には非能格動詞は用いられるが, 非対格自動詞は用いられないと記した。しかしながら, 高見・久野 (1999)で指摘されているように, 実際には, 非対格動詞が現れる場合があるということである:

(29) a. Volcanic material blasted its way to the surface.

(Goldberg 1995: 16)

- b. The avalanche rolled its way into the valley.
- c. The big rock rolled its way down the mountain.
- d. Rainwater trickled its way to the underground pool.
- e. A steel rope snaked its way across the construction site.

(高見・久野 1999: 132)

一方, 見せかけ目的語を伴う非対格動詞の結果構文というのは存在しない:

- (30) a. *The big rock rolled the wood smooth.
 b. *Rainwater dripped the pebbles smooth.
 c. *The novice skier fell the slope smooth.

[E] 経路を表わす前置詞句は, wayの修飾語ではないことは, この二つの補部の間に副詞を挿入できること, すなわち, 構成素の切れ目を置くことができることから, 明らかである:

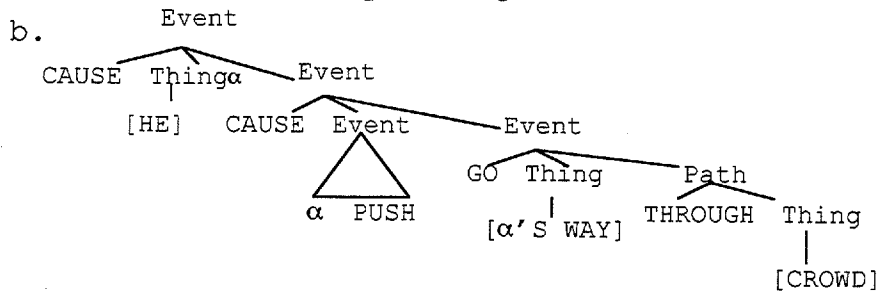
- (31) a. Bill belched his way noisily out of the restaurant.
 (Jackendoff 1990: 212)
 b. "He made his way cautiously along the path beside the lake."
 (Goldberg 1995: 207)
 c. And the mist would sort of thread its way eerily between the trees or ...
 (COBUILD Word Bank)

4. 4. Way 構文の概念構造

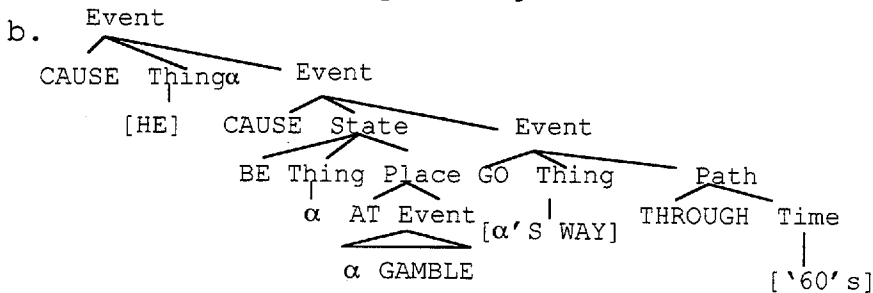
4. 4. 1. 「使役連鎖」モデルでの手段の読みと様態の読み

さて, 前節で見た Way 構文の特性を説明するため, 本研究においては, 「使役の連鎖」モデルを用いて, Way 構文の手段の読みと様態の読みは, それぞれ (32), (33) のような概念構造表示をもつと提案する:

- (32) a. He pushed his way through the crowd.



- (33) a. He gambled his way through the '60's.



上記の (32b), (33b) の構造中の共通部分である [CAUSE ([X], [GO ([α's

WAY], [THROUGH([Y]))])])])は、'x make x's way through y' という意味を表わしている。両構造において異なっている部分は、二番目の CAUSE 関数の第一の項が、(32b)においては Event 構造であるのに対し、(33b)においては State 構造であるという点である。言い換えると、2.2 節で示した概念構造表示モデルでは、前者の中間的な Event 構造は手段を表わす構造であり、後者の State 構造は様態を表わす構造であるということである。

この概念構造表示について、次のような二つの疑問が出されるかもしれない。一つは、何故に [CAUSE([], [GO([], [Path]))])])])が動詞 *make* の概念構造であると言えるのか。第3章での「使役移動」構文のそれと全く同じではないか、両者の違いは何処にあるのか、というものであろう。その答えは、GO 関数の最初の項が変項であるという点で、共通である。しかしながら、通常の「使役移動」構文の場合は、その変項はすでに存在しているものであるのに対し、*make* の概念構造の場合は、その変項はこれまでに存在していなかったものという条件が課されている。この条件が課されると、*make* のもつ「創造する」という意味が表わされることになる。

もう一つの疑問は、では何故に文字どおりなら「自分の道を作る」という意味の '*make one's way*' が、移動の意味を表わすのかとということであろう。この「自分の道を作る」から「自分の道を進む」への意味的な変化は、語用論的含意に支えられて起こっていると考える。従って、ここでは単に '*make one's way*' の個々の語の意味が合わさっているだけではなく、イディオム化が起こっていると思われる。

4.4.2. '*make one's way*' は基本型か？

まず、(32b), (33b)の両構造において、'*make one's way* PP' が基本型とされているが、その主張の妥当性を検討してみよう。このような主張は、めずらしいものではなく、古くは国広 (1970) に遡る多くの先行研究において明示的にしろそうでない形にしろ、示唆されてきている(国広 (1970: 210), 好田 (1988), Salkoff (1988), Goldberg (1995)等)。

その理由としてまず挙げられるのは、前節 [A] で記した様に、通時的には '*make one's way*' から発達してきた構文であるという事実である。また、現代英語の語法においても、'*make one's way*' が Way 構文の典型であるということが出来る。これは、'*make one's way*' の使用頻度が、他の動詞のこの構文の頻度よりはるかに上回っていることによって、示されている。大室 (1999)における COBUILD Direct Service の調査では、全体で 2366 の Way 構文例のうち、動詞 *make* を用いたものは、最も多い 452 例に達している。その次が *find* の 325 例で、この二つの動詞例で、全体の 32.84% を占めていると

いう。筆者が検索した COBUILD Word Bank においても、全体の 396 例中、*make* を用いたものは最も多い 97 例、*find* を用いたもの 32 例で、この二つで全体の 32.57% でほぼ等しい割合になっている。

さらに、'*make one's way*' が Way 構文の原型になっているとする説は、他の殆どの動詞を用いた場合には、単独では、経路を表わす PP や Particle を省略できないのに対し、*make* を用いた Way 構文では省略できるという事実によって強められる²：

- (34) a. *John forced his way.
b. *After his 30 years' efforts in the business world he worked his way.
c. *John belched his way.
- (35) a. Demob (October 15) also star Griff Rys-Jones as an ex-soldier making his way in showbusiness, ...
b. In 1960, larger was still a foreign tripple making its way from the Continet and accounting for less than 1 percent of the overall beer market.
c. You wouldn't be the wonderful British guest, but just another immigrant trying to make his way.

(COBUILD Word Bank)

このことは、動詞 *make* の場合は、'*one's way*' は動詞によって厳密下位範疇化された項であること、他の殆どの動詞を用いた Way 構文の場合には、'*one's way*' は構文の項であっても、動詞の項ではないことを物語っていると言えよう。

'*make one's way*' を Way 構文の原型とする主張は、本研究に限らず、先行研究においても、明示的にしろ暗示的にしろ行なわれている (Goldberg (1995), Salkoff (1988), 大室 (1999) 等)。しかしながら、これらの先行研究での主張は、手段としての読みに限定されたものである。現に、Goldberg (1995) では、手段としての読みの場合のみ、その意味表示において、CEATIVE-MOVE という述語をもつとしている。しかしながら、本研究が手段としての読みも様態としての読みも '*make one's way*' を原型としていると主張するのは、次のような論拠によっている。まず、第一の論拠は、どちらの読みの場合も '*make one's way*' を含意するということが挙げられる：

- (36) a. Large numbers of graduates in arts and sciences regularly find their way into commercial and industrial jobs. => Large numbers of graduates in arts and sciences regularly make their way into commercial and industrial jobs.

- b. He worked his way up from a waiter to a restaurant owner.
=> He made his way up from a waiter to a restaurant owner.
- (37) a. He gambled his way around the U.S.
=> He made his way around the U.S.
- b. They were clanging their way up and down the narrow streets.
=> They were making their way up and down the narrow streets.
- c. The avalanche rolled its way into the valley.
=> The avalanche made its way into the valley.
- d. The driftwood floated its way to the south shore of the island.
=> The driftwood made its way to the south shore of the island.

第二の論拠は、どちらの読みの場合も *how* という疑問詞を用いた '*make one's way*' 疑問文の答えとなりうるということである：

- (38) a. How did the hikers make their way to the mountain-top?
They clawed their way.
- b. How did Pat make her way out of the room?
She pushed her way.
- (39) a. How did volcanic material make its way to the surface?
It blasted its way.
- b. How were they making their way down the narrow streets?
They were clanging their way with bells.
- c. How did they make their way through the '60?
They gambled their way.

第三の論拠は、主動詞の重複に関係している。(18), (19)で示したように、様態の読みの場合は、主動詞を重複することができるが、動詞 *make* や *find* の場合には、可能ではない：

- (40) a. We'd bought and bought our way up the Italian peninsula:
I was dizzy with shopping and new possessions.--H.
Brodkey, "Verona: A Young Woman Speaks" (影山・由本
1998:190)
- b. Big Billie munched and munched his way through a pile of sandwiches.

- c. *He worked and worked his way through college.
 d. *He dug and dug his way out of the prison.
 (41) a. *They made and made their way through the '60.
 b. *They found and found their way into commercial and industrial jobs.

第四の論拠は、主動詞が他動詞の場合、Way構文では本来の厳密下位範疇化した目的語は表わされない。そのような目的語を表わす必要のある時は、3章の(99)における場合と同じく、with-PPを用いるということである：

- (42) a. He drank his way through the whole week with a case of vodka.
 b. He joked his way into the meeting with a lot of cynical jokes.

しかしながら、これは他動詞makeには当て嵌まらない：

- (43) a. *The mole made its way through the wall with a tunnel.
 b. ?She made her way into his heart with superb dishes.

このことは、makeを主動詞とする 'one's way' のみが厳密下位範疇化された目的語であると言えよう。言い換えれば、このことは 'make one's way' が基本型であることを意味する。

4.4.3. Way 構文の特性とその概念構造

では、Way 構文の概念構造を(32b), (33b)であると仮定する時、4.3節で挙げたこの構文の諸特性はどのように説明できるか、検討してみよう。

まず、4.3節の[A]から取り上げてみよう。「困難さや障害を乗り越えて」の移動の含意は、(32b), (33b)の概念構造とも容易に適合できる。なぜなら、(32b), (33b)において骨格となるのは、'make one's way PP'の構造だからである。「主語指示物が、通常のやり方ではなく独自のやり方で進む」というその骨格の構造が表わしている意味は、その背後には困難さや障害があるとの派生的な意味を生じさせ易い。

しかしながら、ここで問題となるのは、Goldberg (1995)は、手段を表わすWay構文は困難の意味を伴うのに対し、様態を表わすWay構文はそうではないと主張していることである。例えば、以下の(44a)は手段の読みをもち、それ故に困難の含意があると言う。また、(44b)におけるmince, wander, meanderの動詞も(44a)のwalkと同様、身体の動きを表わしているが、しかし森を小股で歩いたり、あてもなく歩き回ったりするのに、何ら困難の意味を伴わないと言う。

- (44) a. The novice skier walked her way down the ski slope.
 b. She minced/wandered/meandered her way through the forest.

このような主張に対して、高見・久野 (1999: 326)は、以下のような文においては、様態の読みをもつが困難さの含意があると指摘している：

- (45) a. He lied his way out of the jam.
 b. He finagled his way onto the team.
 c. The smuggler joked his way through customs.

すなわち、(45)では、主語指示物は困難な状況を嘘をついたり、ごまかしたり、冗談を言いながら切り抜けているため、困難を克服したという意味をもつと言う。従って、高見・久野のこの指摘が妥当なものであるならば、困難さの含意は、手段の読みであろうと様態の読みであろうと、Way構文に伴う派生的意味であり、(32b)、(33b)の概念構造を支持するものとなる。

困難さが派生的な意味であることは、必ずしも、常に存在するものではないということである。殊に、主語の意図性が感じられない場合には、困難さも示唆されない。以下のような文がそれを示している：

- (46) a. Clinton scandalized his way out of the White House.
 b. Slick Willie connived his way to the presidency.
 c. The (poor) skier bounced her way down the ski slope.
 d. John lied his way to the lifetime imprisonment.³

(a-dは、大山 (1999: 208))

では次に、[B]のWay構文に生じる動詞の意味的制約について考えてみることにする。この問題に関して、(32b)、(33b)の両構造は以下のことを予測する。両構造はともに、主動詞で表わされている事象構造と'*make one's way PP*'の事象構造の複合体であることに相違はない。しかしながら、前者の手段の読みの構造では、主動詞で表わされている事象が構文の表わしている事象より先行するのに対し、後者の様態の読みの構造では、両事象が同時的に進行する。従って、前者の場合には、主動詞で表わされている行為は一回切りでも構わないが、後者の場合には経路によって指定された距離全体に及ぶことになる。それ故、後者の場合には、Jackendoff (1990)が述べているように、本来的に過程を表わす動詞が繰り返しが行なわれる行為でなければならない。これは、(12)の文の二つの読みを検討することによって確かめられる。

- (47) Sam joked his way into the meeting. (= (12))

(12)の文は、(13)で示したように、手段の読みにも様態の読みにも解釈でき、曖昧である。しかしながら、一回切りの行為を表わす*with-PP*を伴った(48)の文では、手段の読みしか持たない：

(48) Sam joked his way into the meeting with an extremely cynical joke.

一方、繰り返された行為を表わす *with*-PP を伴った (49) の文は、手段の読みが強いものの (47) と同様、曖昧である：

(49) Sam joked his way into the meeting with a lot of cynical jokes.

次の (50) は、(48) と同様、手段の読みしかもたない：

(50) He lied his way out of the jam with a plausible story.

次に、[C] の特性について簡単に言及しておきたい。*way* が通常の名詞として機能していることは、(32b), (33b) の概念構造と矛盾するものではない。なぜなら、*way* は概念構造において、動詞 *make* の目的語の項に相当する位置を占めているからである。

では次に、結果構文と対比される *Way* 構文の特性を取り上げてみよう。まず、1) の *Way* 構文の方が結果構文より多様な動詞が用いられるという点を検討してみよう。先行研究の多くで指摘されているように、結果構文の場合には、RP はしばしば特定の動詞とコロケーション (連語) を成している。従って、意味的、統語的理由からは問題はなくても、コロケーションを成していない組み合わせは、容認度は低くなる：

(51) a. He ate himself sick.
b.?He ate himself ill/nauseous/full.

(52) a. She cried herself to sleep.
b.?She cried herself asleep.
c.?She cried herself calm/wet.

(Goldberg 1995: 192)

それ故、結果構文に生じる動詞の範囲も自ずと限定されたものとなる。一方、*Way* 構文の場合は、動詞と経路を表わす補語との間には連語の関係はない。経路は、移動が行なわれる距離を示すのみである。従って、手段や様態を表わす行為は、結果構文よりははるかに多様なタイプの動詞によって担われることになる。

2) は結果構文への制約としては、強すぎると思われる。それぞれの動詞と RP との間にコロケーションが成り立つならば、結果構文の場合でも、異なる動詞をつなげて使うことも可能である。Goldberg (1995: 217) 自身このような指摘をしておきながら、別の箇所 (Ibid.: 182) では、その反例となる以下のような例を出している：

(53) "Whose whole life is to eat, and drink ... and laugh themselves fat." (OED: Trapp, Comm, and Epist. and Rev.

(1647))

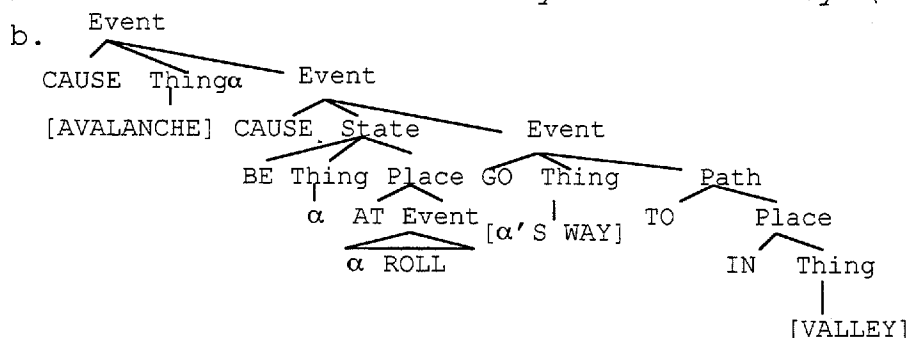
3)に関しては、すでに述べたように、(32b), (33b)のどちらの構造でも、'make one's way PP'を基本型としているので、経路は作られたものという解釈をもつのは、当然の帰結である。

4)の結果構文との相違は、影山が指摘する通りであり、(32b), (33b)のどちらの構造のGO関数構造においても、着点を表わすものだけでなく方角や目標あるいは終点を含意しない経路関数を許容する。

5)の結果構文との相違は、本研究では、Way構文の様態の読みの構造(33b)が手段の読みの構造(32b)とは異なることから、自明である。

6)の結果構文との相違も、Way構文が様態の読みをもつことに起因している。(29)のいずれの文も、様態の読みをもつ。無生のものであっても、自ら独自の様態で進むことのできる(29)のa-eの主語指示物は有生の主語指示物と同様、(33b)の構造に適合する。たとえば、(29b)の文の概念構造は、以下のように表示できよう：

(54) a. The avalanche rolled its way into the valley. (= (29b))



一方、非対格動詞を主動詞とするWay構文の手段の読みと結果構文が存在しないのは、どちらの場合も、主動詞が表わしている事象構造は、構文が表わしている事象構造より先行する手段の構造を成しているので、主語の意図性が含意されやすい。すなわち、特定の結果や経路を生み出す手段となる先行事象は、主語のNPで表わされている項によって制御できるものなければならない。それゆえ、構造自体が意図性を表わしている訳ではないが、意図性の含意を伴いやすい。以下のような無生物の主語、人間以外の動物を主語、あるいは、人間であっても意図性がないことが明らかな主語、の結果構文は、英語話者の間でも容認度に差がでるのは、このためと考えられる：

(55) a. It snowed the roads slippery.

b. It rained the seedlings flat.

c. It thundered the children awake.

(Jackendoff 1990: 238)

- (56) a. ?The rooster crowed the children awake.
 b. ??The boxers fought their coaches into an anxious state.
 c. ?*In the movie's longest love scene, Troilus and Cressida
 kiss most audience squirmy.

(Ibid.: 227)⁴

一方、様態を表わす概念構造は、BE 関数構造による状態を表わすものであるの
 で、主語の NP の指示物が制御できるものでなくてもよい。従って、ここから、
 (29)の各文におけるような非対格動詞が生じる余地が出てくることになる。

特性[E]に関しては、統語構造に関係してくるものであるので、次節 4.5 で取
 り扱うことにする。

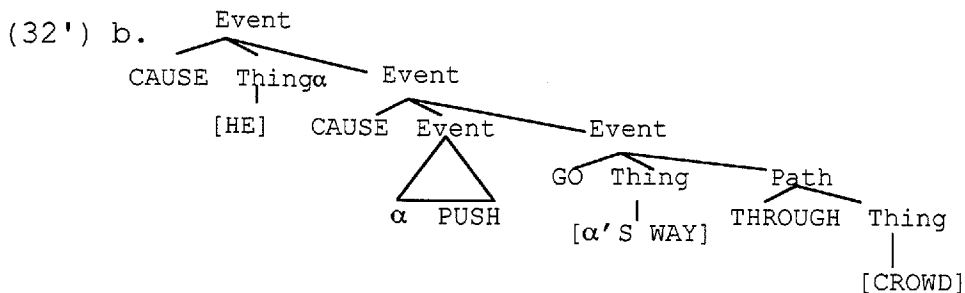
4.5. Way 構文の概念構造から項構造、統語構造への写像

さて、本節では、Way 構文の手段の読みと様態の読みの概念構造を、それぞ
 れ、(32b), (33b)と仮定する時、これらの構造から項構造、統語構造に、どの
 ように写像が行なわれるか、以下考察を行なうことにする。

4.5.1. 概念構造から項構造へ

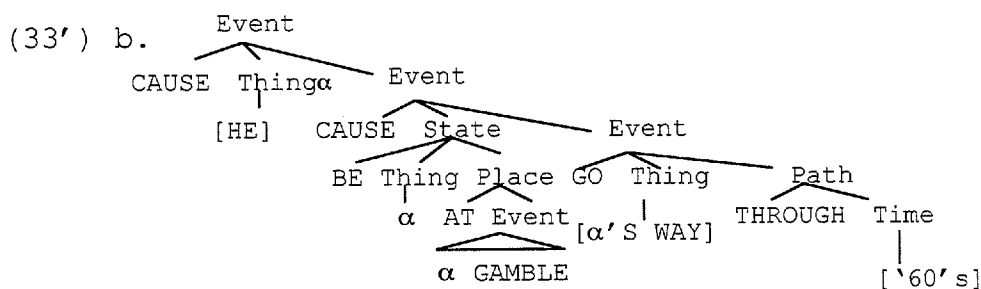
まず、2.3 節で提案した、概念構造から項構造への三つの結び付け規則が、
 (32b), (33b)にどのように適用されるかを、示すことにする。

(32b), (33b)のいずれの構造においても、本動詞の LCS の部分は内項にも外
 項にも写像される項をもたない。従って、まず第一に、GALR が GO 関数構造の
 最初の変項 [α ' S WAY] に適用され、構文の直接的な内項に写像される。次に PPELR
 の規則が経路関数の変項に適用され、構文の間接的な内項に写像される。最後に、
 OCLR の規則が、最上位の CAUSE 関数の最初の項である [HE] に適用され、構文
 の外項に写像される。以上二つの Way 構文の、概念構造から項構造への連結を
 図示すると、下記のように表わされる：



Linking

Rules:	↓ OCLR		↓ GALR		↓ PPELR
Argument	X		<Y>		<P _{loc} Z>
Structure:					

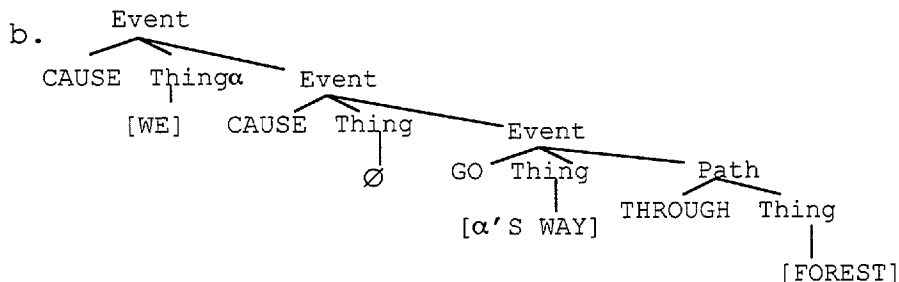


Linking

Rules:	↓ OCLR	↓ GALR	↓ PPELR
Argument	X	<Y>	<P _{loc} Z>
Structure:			

なお、基本型である 'make one's way PP' の場合には、動詞の概念構造と構文の概念構造が一致しているので、[α' S WAY] は動詞の直接的内項に、経路関数の項は動詞の間接的内項に、最上位の CAUSE 関数の最初の項は動詞の外項に、それぞれ写像される。これを、(57a) の文で図示すると (57b) のようになる：

(57) a. We made our way through the forest.



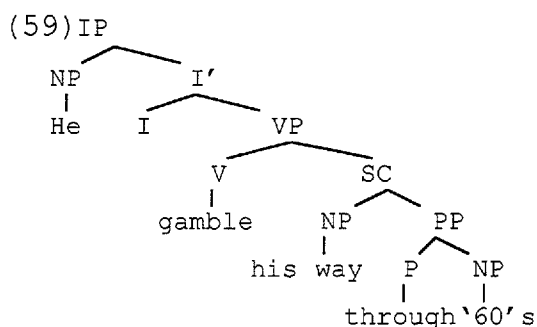
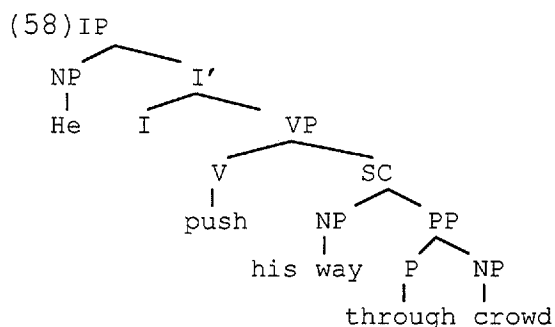
Linking

Rules:	↓ OCLR	↓ GALR	↓ PPELR
Argument	x	<y>	<P _{loc} Z>
Structure:			

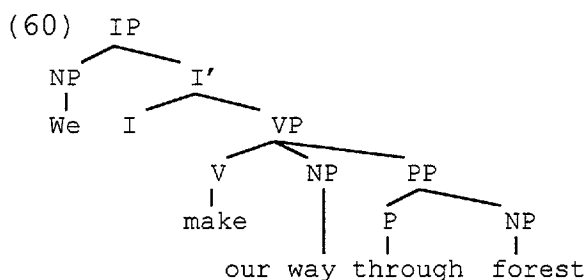
4.5.2. 項構造から D-構造へ

では、前節の (32' b), (33' b) の項構造から写像される D-構造はどのようなものか検討してみよう。両構造の場合、本動詞で表わされている事象構造には、内項や外項に写像された項は存在せず、構文の内項及び外項が存在するのみである。その点において、3章の (80' b) と本質的に相違はない。従って、どちらの構造においても、2章の (31) により、構文の外項は動詞の主語に、構文の直接的内項と間接的内項は、語彙項目エントリーによって指定された項ではなく、かつ述語関係を成しているので、小節を構成することになる。それ故、(32' b),

(33'b)は、それぞれ、(58)、(59)のような D-構造をもつ：



一方、(57b)の項構造の D-構造への写像の場合には、第2章(30)の対応関係から、動詞の内項は他動詞 *make* の目的語に、間接的内項は前置詞句の目的語に、外項は動詞の主語に連結される。その結果、(57b)の項構造は前章の(101)の場合と同様、D-構造においては三項構造に連結されることになる：



(60)のような三項の VP 構造と(58)、(59)のような小節をとる VP 構造の相違を示す論拠は、以下の三点である。

まず第一は、経路を表わす PP や Particle の省略に関係している。前章の(104)と同じく、(35)と対比される(34)の文の非文法性は、後者においては、動詞の直後の名詞句が真の目的語でないことを表わしている：

- (61) (=34) a. *John forced his way.
 b. *After his 30 years' efforts in the business world
 he worked his way.
 c. *John belched his way.

- (62) (=35) a. Demob (October 15) also star Griff Rys-Jones as an ex-soldier making his way in showbusiness, ...
 b. In 1960, larger was still a foreign tripple making its way from the Continet and accounting for less than 1 percent of the overall beer market.
 c. You wouldn't be the wonderful British guest, but just another immigrant trying to make his way.

(COBUILD Word Bank)

二番目の論拠は、過程名詞化に関わるものである。以下のデータを観察されたい。

- (63) a. The making/finding of one's way into commercial and industrial jobs was observed among large numbers of graduates in arts and sciences.
 b. The digging of one's way out of the prison was not rare among prisoners those days.
 c. (?) The clawing of one's way to the top was observed among hikers.
 d. ?The gambling of one's way through the 60's was common among those men.
 e. *The falling of one's way down the ski slope was common among novice skiers.

上記に示されるように、*make* と一部の他動詞を用いた Way 構文は、過程名詞化が許容されるが、そのほか、とりわけ、自動詞を用いたものは許容されにくい。この事実は何を意味しているのであろうか。まず、*make* が過程名詞化ができるということは、動詞の後に続く 'one's way' が、(60)におけるように、動詞の姉妹を成している構造であることに外ならない。そのほかの *find*, *dig* などの他動詞の場合も過程名詞化が可能なのは、'one's way' が語彙エントリーにおいて厳密下位範疇化された項、すなわち、動詞の姉妹である項と再解釈され易いからであると思われる。それに対し、自動詞の場合の過程名詞化の容認度が著しく下がるのは、'one's way' がもともとそのような再解釈を許さないからである。

三番目の論拠は、「指定主語条件」とのかかわりである。(64)に見られるように、*make* と *make* 型の Way 構文においては、'one's way' の後の前置詞の目的語を抜き出すことができるが、(65)に見られるように、その他の動詞を用いた Way 構文ではそれは当て嵌まらない：

- (64) a. What did he make his way through?

- b. What did he find his way through?
 - c. What did he work his way through?
 - d. What did he dig his way through?
- (65) a.*What did they eat their way across?
 b.*What did Bill belch their way out of?
 c.*What did Sam joke his way into?

この事実は、(65)におけるような動詞の Way 構文では、'one's way' は小節の主語であるのに対し、(65)のそれは動詞の姉妹であることを物語っている。

この節の最後に、4.3 節の特性 [E] について簡単に触れておきたい。経路を表わす前置詞句と way が別の構成素であるということは、(60) のような三項構造を立てようと、(58), (59) のような [V-SC] の構造を立てようと、矛盾なく適合するものである。

4.6. 結び

本章では、英語の Way 構文の手段の読みと様態の読みの概念構造表示とその統語表示への写像に関する問題について議論してきた。

そのいずれの読みの場合も、本研究が採用している「使役の連鎖」モデルでは、'make one's way PP' の LCS を基本型としている。手段の読みの方は、この基本型に二番目の CAUSE 関数の第一の項として Event 構造が加わった構造表示をもつ。この Event 構造は主節動詞の事象を表わしている。一方、様態の読みの方は、基本型に、二番目の CAUSE 関数の第一の項として State 構造が加わった構造表示をもつ。この State 構造には、主節動詞の表わしている事象が含まれる。このような二種類の概念構造を立てることにより、これまでの先行研究で明らかにされてきた Way 構文のさまざまな特性に、自然かつ的確な説明が与えられることを示した。

概念構造から項構造への写像は、結果構文の場合と同様、2.3 節の (25) - (27) の規則を (29) の順序に従って適用し、項構造から D-構造への写像は、2.3 節の (30) 及び (31) の原則にのっとって行なわれた。その結果、統語的には、make と make 型の Way 構文の LCS は、Weak タイプの結果構文の場合と同様に、D-構造では三項構造に連結される。これに対し、その他殆どの動詞の場合は、手段の読みであろうと様態の読みであろうと、その概念構造は、非能格自動詞結果構文の場合と同様、動詞に後続する小節をもつ VP 構造に連結される。この二つの統語構造により、経路を表わす補部の省略、過程名詞化、経路を表わす補部の抜き出しなどに見られる統語的事実の明確な説明が可能になる。

第5章：結論

以上の3章、4章において、「使役の連鎖」モデルによる二つの見せかけ目的語構文、すなわち、非能格結果構文及びWay構文の分析を提示してきた。このモデルでは、Instrument, Means, Mannerは「使役の連鎖」の中で中間的位置を占め、そしてさらに、Instrumentは非節構造、Mannerは状態を表わす節構造、Meansは非節構造、節構造の両方を取りうるが、節構造の場合は行為の事象を表わしている。このモデルにおいては、Fake Objectをとる結果構文の場合は、本動詞のLCSは全体の「使役移動」の事象構造中の手段の節構造を構成している。また、Way構文の場合は、全体は'make one's way PP'の概念構造を成している。手段の読みの場合は、本動詞のLCSは全体の事象構造中の手段の鎖を構成している。これに対し、様態の読みの場合には、本動詞のLCSは全体の事象構造中で様態の鎖である節構造に含まれている。

概念構造から項構造への結びつきに関しては、両構文ともに、本動詞のLCSは変項を持たないので、構文の概念構造の変項が、構文の外項、内項に写像される。そして、項構造からD-構造への結びつきに関しては、所謂「見せかけ目的語」は、動詞によって認可された項ではないので、二次的述語または経路を表わす前置詞句とともに小節を構成する。

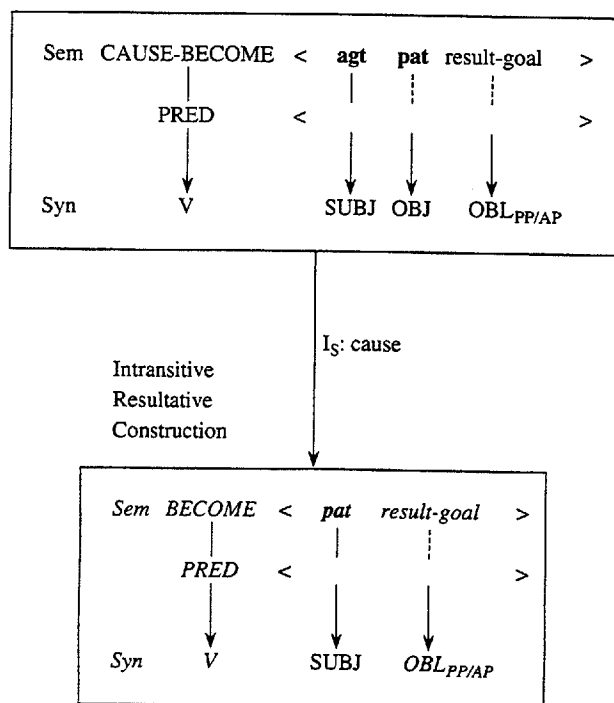
現代の言語研究の大きな関心の一つは、形式と意味の対応関係の問題である。この問題に関して、構成性の原理に基づく従来の概念構造意味論の立場からの主張は、文においていくつの数の項が生じるか、また、どのような種類の項が生じるかを決定するのに主要な役割を果たすのは、動詞であるというものである。またさらに、動詞の振る舞いはその意味的特性によって決定され、いわゆる「構文交替現象」も、構文において用いられる動詞の特性によって説明できるとしている。このアプローチに対して、Goldberg (1995)の構文文法の立場及びLangacker (1986)の認知言語学の立場では、「構文」というものが一つの「ゲシュタルト」として、特定の動詞の意味と独立して意味を担うものであるというのが、根本的な主張である。そして、「構文交替」は、「ゲシュタルト変換(Gestalt shift)」もしくは「profile化された事象の別の解釈(the alternate construal of the profiled event)」から生じるとしている。

「使役の連鎖」モデルによる本研究も、構文が動詞とは独立した意味を担うという点では、同じ考えに立つものである。しかしながら、本研究での分析は、少なくとも次の二点において、Goldberg (1995)のそれよりも優れていると言えるであろう。

まず、第一点は、本研究が用いているモデルでは、動詞と構文の意味の区別をより明示的に説明できることである。Goldberg (1995)では、動詞の意味を

単なる参与者役割のリストとして済ませている。例えば、他動詞と（非対格）自動詞の結果構文は、Goldbergの構文文法では、(1)のように分析されている：

(1)



(Goldberg 1995: 191)

しかしながら、例えば、同じ他動詞であっても、*break*と*hit*では、3.3節で見たように、他動詞構文に生じた場合では、異なる振る舞いをする。さらに、3.4節で見たように、この二つの動詞が結果構文に生じた場合、共通の特性がある一方で、異なる特性もある。*telicity*や中間構文との関係は共通の特性であるのに対し、完了形容詞化、数量詞連結、過程名詞化などは異なる特性である。なぜ、特定の構文における動詞間の振る舞いの違い、また、特定の動詞の構文間の異同が生じるのか。このような異同の理由は、(1)におけるような分析では、説明されないままである。また、Way構文にあっては、*make*型のグループとそうでない動詞のグループでは、経路を表わす前置詞句の省略、過程名詞化などに相違が見られるが、これに関しても、同様にその理由は、明らかではない。動詞の意味も構文の意味も、同じ関数構造で表示される本研究におけるような分析でのみ説明可能となる。

二点目は、一点目と関連しているが、「構文交替現象」に関してである。第3章での「脱使役化」、「中間構文化」での議論で見たように、これらの交替に決定的に係わっているのは、動詞の意味であった。動詞の意味表示が参与者

役割のリストのみでなされている Goldberg の枠組みでは、交替現象がなぜ起るのか的確に説明することは困難であろう。

最後に、本研究の base をなす「使役連鎖」モデルについても触れておきたい。今後は、Time-away 構文、二重目的語構文などを用いて、このモデルでの意味表示と、それぞれの構文の意味的項と統語的項の連結に関する考察を行なうことにより、このモデルの妥当性を検証して行く必要がある。

注

第2章

1) ここでの *microscopically* は、道具付加詞としての用法であって、様態付加詞としての用法ではない。

2) ここでの節構造とは、あくまでも概念構造上での節構造の意であって、統語構造上での意ではない。

3) これ以降の樹形図における角括弧で囲まれている述語の項は、変項を表わし、囲まれていない項は定項を表わす。

4) ちなみに、(31a), (31b), (31c)の用法の語彙項目エントリーは、それぞれ、(ia), (ib)のようであると考え：

- (i) a. [CAUSE([]_α, [CAUSE([α BE AT([α WIPE])]),
[GO([DIRT/LIQUID], FROM([]))])])]
b. [CAUSE([]_α, [CAUSE([α BE AT([α WIPE])]),
[GO([], FROM([]))])])]
c. [CAUSE([]_α, [CAUSE([α BE AT([α WIPE])]),
[GO([], TO([]))])])]

なお、この *wipe* の三つの用法は、次の 2.4.2-2.4.3 の場合と同様、事象構造の合成であると捉える点では同じであるが、動詞 *wipe* の自動詞用法はないので、語彙項目エントリーですでに、合成した構造は規定されているとここでは分析している。

第3章

1) なお、Washio (1997) の分類では、フランス語は、“Spurious resultative”しかないとされている。これは、しかしながら、Washio が RP として形容詞をとる結果構文のみを考察の対象としているからである。本研究におけるように、前置詞句も含めるならば、以下のような“Weak resultative”の例を見い出すことができる：

- (i) briser quelque chose en morceaux, peindre quelque chose
en bleu, casser quelque chose en deux, mettre qc en pièces
...

(『12か国語大辞典』より)

2) 厳密な意味では、*wipe* は状態変化動詞と接触・打撃動詞の中間に位置すると言える。なぜならば、第2章の(32a)の図が示すように、GO 関数の最初の項が、*hit* などと異なり、CAUSE 関数の束縛項ではないという点では、*break* などの状態変化動詞と同じである。しかしながら、その項は変項ではなく定項である。その結果、目的語に写像される項は、接触・打撃動詞と同じように、<場

所>の項となる。

3) -ed 形容詞を，多くの文献では「形容詞的受動分詞 (adjectival passive)」と呼んでいる。しかしながら，他動詞のみから-ed形容詞は形成されるのではなく，以下に見られるように，非対格動詞からも形成される：

- (i) elapsed time, a fallen leaf, newly arrived packages, collapsed lung, a deceased celebrity ...

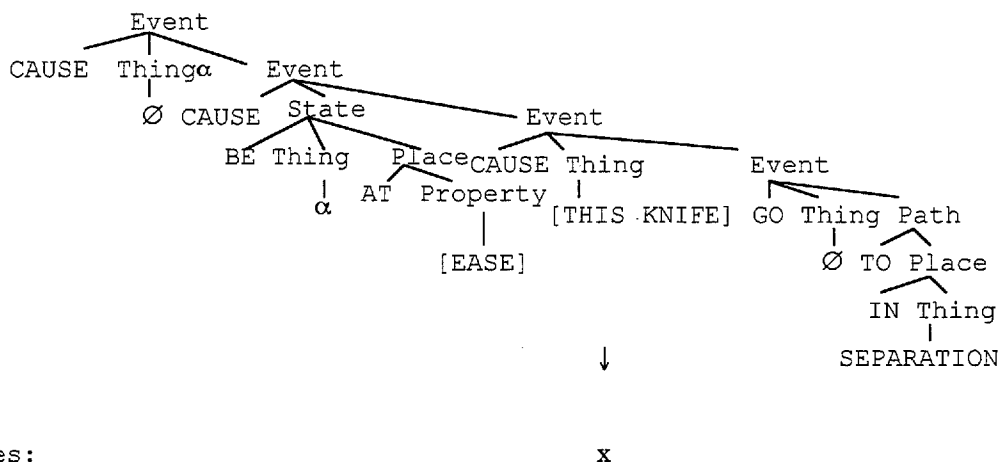
従って，影山 (1996)が指摘するように，-ed 形容詞は「受動」の意味を表わすというよりは，「結果状態」を表わしている。それ故に，「完了形容詞」という用語の方が，適当である。

4) さらに，中間構文が「使役の連鎖」モデルで最もよく表示できる論拠としては，(i)のような Theme ではなく，道具の項を主語とする文の存在がある：

- (i) This knife cuts easily.

このような文の場合には，動作主の項ばかりでなく，Theme の項も特定の指示物をもたない。従って，(ii)のような表示をもつ：

- (ii)



(i)が(ii)のような構造をもつことは，Theme の項が無指定にならない時，以下のような他動詞文として実現できることから，窺い知れる：

- (iii) This knife cuts meat easily.

ちなみに，中間構文の統語的分析には，(iva)は(ivb)から派生されるとするNP移動説がある：

- (iv) a. This book sells well.
b. [e] sells this book well

これは，中間構文の主語は，動詞の直接的内項でなくてはならないとする制約に基づくものである。しかしながら，この種の分析では，(i)のような文の存在を説明することはできない。

5) この構造は，パラフレーズするならば，'John made the metal flat by

hitting it'を意味する。類似した考え方は、安藤 (2000)の結果構文の分析においても示されている。

なお、Strong タイプの他動詞結果構文の場合、本動詞の LCS は手段を表わす CAUSE 関数の項に位置することは、この種の結果構文の場合、Weak タイプのそれとは異なり、手段を表わす付加詞を後続できないことから窺い知れる：

- (i) a. John broke the vase to pieces by hammering on it.
- b. *The horses dragged the logs smooth by rolling them.
- c. *He hit the ball into the field by kicking it.

6) 状態変化他動詞の場合でも、前節で示したように、*break*の目的語として *promise*のような名詞句をとった場合は、CAUSE 関数の第一の項に立てない。それゆえ、「脱使役化」は起こらず、対応する自動詞結果構文は存在しないことになる。

7) 注の5)の (ib, c)の場合と同じく、非能格自動詞結果構文においても、手段を表わす付加詞を後続できない：

- (i) *John drank all the teapots dry by eating extremely hot dishes.

8) なお、本稿においては、非能格自動詞そのものの概念構造がどのようなものであるかの議論は、行なわない。他動詞の場合には、その概念構造がどのようなものであるかによって、結果構文の概念構造も異なることになった。非能格自動詞の場合、本来、内項をもたないので、本節の議論にとって重要なのは、非能格動詞の概念構造には、外項に写像される項が一つあるという点のみである。

9) この例は、以下のような、Jackendoff (1997: 535)の 'time-away' 構文の特性を示す例にヒントを得て、筆者が作り、インフォーマントに確認を、取ったものである：

- (i) a. Fred drank the night away with a bottle of Jack Daniels.
- *Fred drank with a bottle of Jack Daniels.
- b. Ann read the morning away with a pile of old mysteries.
- *Ann read with a pile of old mysteries.

10) ここで、何故、概念構造での空範疇である β が、統語上の空範疇 PROに対応するのかという疑問が、起きるかもしれない。両構造の空範疇の対応関係については、今後の研究に委ねられねばならない。しかしながら、ここで暫定的にこのように仮定したのは、次のような理由による：音声内容をもたず、統率されない位置にある。

11) 筆者のあたったインフォーマントの一人は、これをOKとしている。以下に挙げるデータを含めて、この種の名詞化に関しては、ネイティブ間でも判断

の差が大きいようである。

第4章

1) 影山・由本 (1998: 188)等においては、様態の読みとは別に、移動の随伴動作としての読みも認めている。本稿では 2. 2 節の Manner の分析に従い、随伴動作も様態の一種と考える。

2) 影山 (1995: 183)は、make 型の Way 構文として、*find, feel, grope* も含まれるとし、これらの動詞も以下におけるように、前置詞句を省略可能としている：

(i) a. Just tell me how to go there and I'll find my own way.
(COBUILD)

b. each participant in a discussion feels his way
cautiously (Reischauer, *The Japanese*)

c. Guennar heard him stumble and swear as he groped his way.
(U.K. Le Guin "The Stars Below")

しかしながら、このことは 'make one's way PP' が Way 構文の基本型とする本研究での主張に抵触するものではないと考える。(i)の場合、各動詞それ自体と one's way との結びつきでイディオム化し、「移動」を表わし得るようになっていられると思われる。

3) この種の文の容認度には言語話者の間で差が見られるようで、筆者が尋ねたインフォーマントは、a と d は OK ではないと判断している。これは、おそらく、後で触れるように、手段の読みには意図性の含意が伴うので、手段の読みをもつばらとする文においては、それが感じられない時には、成立しにくいのではないかと考えられる。

4) Jackendoff (1990)では、(55)のような文は、Carrier & Randall においては、少なくともある話者にとっては容認可能であるとしているが、Jackendoff 自身と彼が尋ねた人々はそうではないとしている。また、(56)も、Carrier & Randall においては、すべて容認可能とされているが、Jackendoff 自身は、a の文のみはまずまず容認できるがほかは周辺的であるとしている。

参考文献

- 天野政千代 (1999) 『言語要素の認可—動詞・名詞句・副詞—』 研究社出版
- 安藤貞雄 (2000) 「結果構文とプロトタイプ(上)(中)(下)」 『英語青年』
Vol.145 No.10: 641-644, No.11: 715-720, No.12: 752-756.
- Carrier, Jill and Jane Randall (1989) "From Conceptual Structure to Syntax: Projecting from Resultatives," ms., Harvard University and Northeastern University.
- Carrier, Jill and Jane Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structures of Resultatives," Linguistic Inquiry 23, 173-234.
- Chomsky, Noam (1981) Lectures on Government and Binding, Foris Publications, Dordrecht.
- Croft, William (1991) Syntactic Categories and Grammatical Relations, University of Chicago Press, Chicago.
- Fillmore, Charles J. (1970) "The Grammar of *Hitting* and *Breaking*," Readings in English Transformational Grammar, ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 120-133, Ginn and Company, Waltham, MA.
- Fraser, Bruce (1970) "Some Remarks on the Action Nominalization in English," Readings in English Transformational Grammar, ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 83-98, Ginn and Company, Waltham, MA.
- Goldberg, Adele (1995) Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure, University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele (1996) "Making One's Way Through the Data," Complex Predicates, ed. by Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson, 29-53, Clarendon Press, Oxford.
- Gruber, Jeffrey S. (1965) Studies in Lexical Relations, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Gruber, Jeffrey S. (1976) Lexical Structures in Syntax and Semantics, North-Holland, Amsterdam.
- Hoekstra, Teun (1984) "Small Clause Results," Lingua 74, 101-39.
- Inoue, Kazuko (1992) "Cause and Make in Semantic Representation," English Linguistics 9, 132-51.

- 井上和子 (1998) 「経路のある変化とない変化--概念構造における状態変化の表示に関して--」 JELS 15, 51-60.
- 井上和子 (1999) 「他動詞の語彙概念構造とその結果構文」 『言語文化研究』 (広島大学総合科学部紀要 V) 25, 133-160.
- Inoue, Kazuko (2001) "Verb Meaning vs. Construction Meaning: The Cases of Hit, Spray and Load --A Lexical Network Approach to Verbal Semantics by Seizi Iwata, Kaitakusha, Tokyo, 1998 --" (Review Article), English Linguistics 18.2, 670-695.
- Iwata, Seizi (1998) A Lexical Network Approach to Verbal Semantics, Kaitakusha, Tokyo.
- Jackendoff, Ray (1976) "Toward an Explanatory Semantic Representation," Linguistic Inquiry 7, 89-150.
- Jackendoff, Ray (1990) Semantic Structures, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1992) "Babe Ruth Hommered His Way into the Hearts of America," Syntax and Semantics 26, ed. by Tim Stowell and Eric Wehrli, 155-178, Academic Press, New York.
- Jackendoff, Ray (1997) "Twistin' the Night Away," Language 73, 534-559.
- 影山太郎 (1995) 「語彙概念構造の合成と one's way 構文」 『英米文学』 (関西学院英文学会) 40.1, 179-202.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- Kageyama, Taro (1997) "Denominal Verbs and Relative Salience in Lexical Conceptual Structure," Verb Semantics and Syntactic Structure, ed. by Taro Kageyama, 45-96, Kuroshio Publishers, Tokyo.
- 影山太郎・由本陽子 (1998) 『語形成の意味と文法』 研究社出版
- Keyser, Samuel and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," Linguistic Inquiry 15, 381-416.
- 好田 實 (1988) 「'V+one's way' の性格と生産性」 『英米研究』 (大阪外国語大学英米学会) 16, 129-148.
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』 三省堂
- Lakoff, George (1965) "On the Nature of Syntactic Irregularity," NSF (Mathematical Linguistics and Automatic Translation. Report to the National Science Foundation) 16, the

- Computational Laboratory of Harvard Univ., Cambridge, MA.
- Lakoff, George (1970) Irregularity in Syntax, Holt, Rinehart & Winston, New York.
- Levin, Beth (1993) English Verb Classes and Alternations, University of Chicago Press, Chicago.
- Levin, Beth and Malka Rappaport (1986) "The formation of Adjectival Passives," Linguistic Inquiry 17, 623-61.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface, MIT Press, Cambridge, MA.
- Levin, Beth and Tova Rappaport (1988) "Lexical Subordination," CLS 24, 275-89.
- Marantz, Alec (1992) "The Way-Construction and the Semantics of Direct Arguments in English: A Reply to Jackendoff," Syntax and Semantics 26, ed. by Tim Stowell and Eric Wehrli, 179-88, Academic Press, New York.
- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意」『月刊言語』 Vol.27 No.1: 86-95, No.2: 94-102, No.3: 104-13.
- 三原健一 (1999) 「数量詞連結構文: 文脈的結果性と文法的結果性」 第71回日本英文学会全国大会 (於 松山大学) シンポジウムハンドアウト
- 大室剛志 (1999) 「One's Way 構文について: Simple Composition から Phrasal Lexical Idioms へ更に Costructional Idioms へ—動的言語理論の立場から—」 第71回日本英文学会全国大会 (於 松山大学) 研究発表ハンドアウト
- 大山恭子 (1999) 「部分と全体: Way 構文の多義性へのアプローチ」 JELS 16, 201-210.
- Pinker, Steven (1989) Learnability and Cognition, MIT Press, Cambridge, MA.
- Quirk, Randolph, Geoffrey Leech and Sidney Greenbaum (1985) A Comprehensive Grammar of the English Language, Longman, London.
- Salkoff, Morris (1988) "Analysis by Fusion," Linguisticae Investigationes 12, 49-84.
- 高見健一・久野 障 (1999) 「Way 構文と非能格性 (1)-(3)」『英語青年』 Vol.145 No.1: 128-33, 145, No.2: 214-23, No.3: 324-29.
- Talmy, Leonard (1985) "Force Dynamics in Language and Thought,"

- Papers from the Twenty-first Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Part 2: 293-337, Department of Linguistics, University of Chicago, IL.
- 田中茂範・松本 曜 (1997) 『空間と移動の表現』 研究社出版
- Tenny, Carol (1994) Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface, Kluwer, Dordrecht.
- Van Valin, Jr. Robert. (1990) "Semantic Parameters of Split Intransitivity," Language 66, 221-60.
- Washio, Ryu-ichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," Journal of East Asian Linguistics 6, 1-49.
- Yamada, Yoshihiro (1987) "Two Types of Resultative Construction," English Linguistics 4, 73-90.
- Yoneyama, Mitsuaki (1986) "Motion Verbs in Conceptual Semantics," Bulletin of the Faculty of Humanities 22, 1-15, Seikei University, Tokyo.

【市販コーパス・辞書】

- The Brown Corpus and the Lancaster-Oslo-Bergen Corpus* on the ICAME CD-ROM. 1991. Norwegian Computing Centre for the Humanities, Bergen, Norway.
- Collins COBUILD on CD-ROM*. 1995. Harper Collins.
- 市川繁治郎(編) 1995. 『新編 英和活用大辞典』 研究社出版
- 『12か国語大辞典』(CD-ROM). 1998. 三修社